



横芝光町 文化遺産ガイド

1



横芝光町教育委員会



はじめに

横芝光町は、北部に下総台地の里山、南部に九十九里平野の平地が広がり、町の中央を北から南へ栗山川が流れ、太平洋に注ぎ、温暖で山紫水明、緑豊かな所です。そこには古来から人々が行き来し、様々な足跡を遺してきました。また、温暖な環境は、豊かな自然を育み、様々な草木や動物が生息してきました。そのような人々の足跡や自然を、ここでは取り上げ、紹介し、この豊かな町を改めて知っていただこうと思います。さらに身近な物として知っていただくため、地図に示しながら、実際に歩いて訪れられる様にした。このガイドブックを片手に町内を歩いてみてはいかがですか。

横芝光町は、旧横芝町と旧光町とが平成18年に合併してできた新しい町で、もう10年余になります。町の中央を栗山川が流れ、それを境に古代から上総国と下総国に分かれ、長いこと離ればなれでいました。しかし、人々の往来は古くから常にあり、隣同士として密接な関係を有していました。そうした先人の足跡をたどりながら歩ける様にと、このガイドブックを構成しました。そのためあまり厚くならない様に、ガイドブックを3分冊とし、町を大きく三つに区切って、掲載する事にしました。1はJR横芝駅から西へたどり、本町、上町、そして北へ向かって長倉から中台へと下総台地の道を進み、そこからまた栗山川を見ながら駅へ戻ってくる道筋で、それに当たる所を紹介しました。2は横芝駅から東へ、そして栗山川東側の台地の道を、3は九十九里平野の道をたどります。このガイドブックに町の全てを紹介する事はできませんが、実際に歩いてまた新たな発見をしてみるのも、一つの楽しみとなるでしょう。

目 次

はじめに

目次

この本について

1. JR横芝駅	1
一. 本町から上町へ	2
二. 坂田池から寺方台地・取立	11
三. 長倉	21
四. 姥山・遠山・桜前	34
五. 中台	44
六. 中台角田から木戸台上笊内	53
七. 牛熊・谷台	63
八. 木戸台・町原・小堤	70
九. 寺方・坂田・曾根合・於幾・両国新田	86
十. 古川・本町東部	98



小堤上の池

この本について

この本は、町内に所在する文化財(天然記念物・史跡等を含む)を、指定、無指定に関係なく、紹介したものです。合併直後に作った文化財マップは、町の代表的な文化財を紹介したのみでしたが、町内外の多くの方からは、それから漏れた文化財についても問い合わせが多く寄せられ、それに対応する必要性がありました。

それは、この小さな町でも町内を歩いてみると、そこかしこに過去の人々が遺した様々なものを見る事ができます。また、まだ多くの貴重な自然が残され、それが失われる前に多くの方に見て頂きたいものもあります。

そこで本書は、ハンドブックサイズとして、この本を片手に、町内を歩いて巡れる事を考え、町内各地を半日から1日をかけて歩ける範囲の地図を入れ、その地図に道程を示しました。できるだけ写真を多く入れ、歩いた先での風景や文化財発見の追体験できれば幸いです。しかし、今日の変化は急激で、この本をまとめている間にも、既に無くなってしまったという情報も入ります。

そのため、この本が使いやすい様に、本が厚くなつて重くならないよう、3分冊に分けて編集しました。3冊ともJR横芝駅を起点とし、一筆でめぐり歩ける様に構成しました。1は町北西部を所収し、2は町北東部を、3は町南部の九十九里平野を巡るようにしました。

この本を作るに当たっては、合併前からの光町文化財講座、及び合併後の歴史ロマン研究会の石仏調査、さらに生涯学習講座「郷土を知る再発見の旅」などにおいて、町内をくまなく踏査した成果をもとに、まとめたものです。歴史ロマン研究会での活動は講座から含めて20年近くに及び、既に故人となられた方もいます。再発見の旅では5年をかけて町内を隅々まで歩き、様々なものを発見して廻りました。これらに参加し、一緒に歩き、調査したり発見した方々に、厚く御礼申し上げます。



1. JR横芝駅駅舎

JR横芝駅駅舎は、明治30(1897)年、当時の総武鉄道が銚子まで開通した時、建てられた駅舎を未だに使っている、県内では最も古い駅舎と言われている。木造でありながら100年以上の風雨に耐え、未だに現役として健在である。その駅舎には先の大戦で銃撃を受けた傷跡があると謂れる。現在は貨物の取り扱いはやめ、貨物の引き込み線だけが残り、駅舎の中の切符販売は自動券売機に変わり、改札口は自動の検札機が設置されて変わったが、待合所の腰掛けは変わっていない。



駅舎の外観

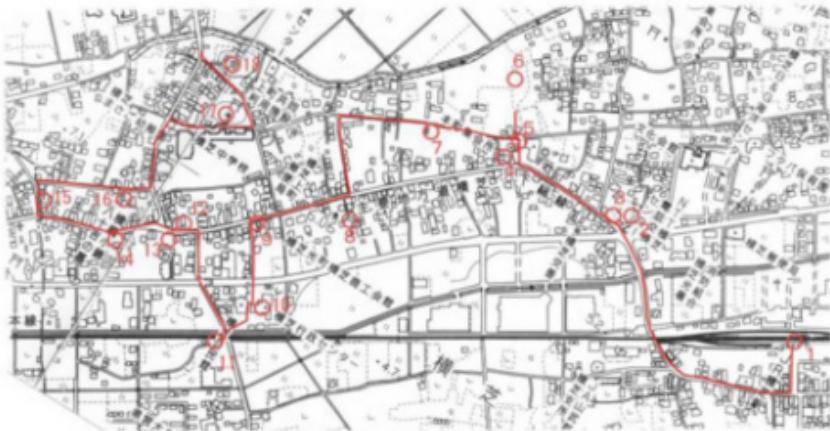


待合所



券売機と改札口

一、本町から上町へ



駅前の十字路を右手に曲がり、駅前通りを西に向かって踏切を渡り、その先の国道を越えて行く道が銚子街道(千葉から東金、八日市場を経る)の旧道である。この国道との交差点から5~600mの両側が本町と呼ばれ、横芝の元々の町並みであった。さらにその先から町境までを上町と呼ばれる。この通りをこのように上町、本町と呼ばれたのは、町境に金刀比羅神社というこの辺では最も大きい村社があり、この神社を中心に町が出来上がった門前町であったと思われる。上町のある旧家には江戸時代後期天保7年に書かれた絵地図があり、街道沿いには町家の軒が連ね、多くは商家か宿屋などで、金刀比羅神社にお参りする近郷近在の村人や、銚子へ行き交う旅人で賑わっていたであろう事が記されている。しかし、明治に入って鉄道が通り、駅が今の東町にできると、町の中心はそちらに移り、急速に衰退していった。今日でも本町、上町の通りには、かつての商家の建物が何軒か残り、往時の面影を伝えている。



本町通りに残る商家

2. 本町馬頭観音

駅から旧道を西へ進み、国道を越えるとすぐ右に小道があり、そこを曲がると目の前に石仏群が建っている。石仏群の中で最も大きい板石には馬頭観世音と文字が彫られ、また前面に半ば埋もれた石仏は、馬乗り馬頭観音と三猿の像容塔である。このような石造りの馬頭観音は、馬を供養するために建てられた物で、街道筋や墓地脇などに建てられた。この本町の馬頭観音も、すぐ裏が墓地であり、ここに馬が埋葬されたのかもしれない。今でこそ馬は見られなくなったが、かつて馬は農耕や運輸の重要な担い手であり、大事に育てられ、亡くなれば丁重に葬ったのである。そして馬の労苦を悼み、供養するためにこうした馬

頭観音の石塔を、埋葬地や馬が往来した道筋に建てたのである。町内にはこうした馬頭観音があちこちに見られる。



5 基の石塔が並ぶ本町馬頭観音

3. 本町大師堂

大師と言えば弘法大師が最も有名である。弘法大師と言えば四国八十八箇所遍路巡礼が思い浮かべる。この関東においても大師信仰が中世以降広まり、弘法大師伝説なども各地に根づいていった。近世になって四国遍路が盛んになったが、遠い関東からはなかなか四国までは行けない。そこで関東でも容易に遍路巡拝ができる様にと、各地に石の大師様が作られた。本町の大師堂は、野ざらしではかわいそうとお堂を建て、そこに安置したのであろう。春、桜の季節になると、白い遍路装束を纏つた善男善女が巡拝する姿を目にする。



お大師様を奉る本町の大師堂

4. 本町観音寺

本町西松ヶ枝にある観音寺は、観音菩薩を本尊とする真言宗智山派の寺院で、神社が数多い本町・古川の中で、寺院はこの1寺のみである。通りから門を入れると、さほど広くない境内の先に瓦屋根の本堂がすぐ建ち、横に庫裡が並ぶ小されいなお寺である。住職が在院され、日々手入れを怠らないためであろう。このお寺は天文3(1534)年の開山と言われ、江戸期は多くの檀家を抱え、賑わったであろう。



本町観音寺

5. 観音寺裏の小堂群

観音寺脇の小道から裏手に回ると、お寺のすぐ裏に小堂が並んでいる。中央には木造大師像、向かって右側は胸をはだけた木造子安觀音が奉られ、左側には石像仏が4基縱に並んでいる。元は別々の所に置いた物が、ここに集められて奉られたのであろう。石仏は如意輪觀音2体、子安觀音、聖觀音で、子安觀音を除き、江戸期の石仏である。



大師様と子安觀音



観音寺裏の小堂



石仏群

6. 古川蚕糸乾繭所跡

観音寺裏からさらに北側の方を見ると、広い空地がある。入り口の看板を見ると横芝乾繭所と書かれ、奥にはレンガ積みの廃墟が見られた。この地域では明治以来養蚕が盛んで、昭和40年頃まで続いた。

しかし、その後の絹の輸入増加によって国内養蚕の衰退も、

この地にも及び、この乾繭所も廃墟となつたのであろう。聞く所ではこの地域の繭がここに集められ、レンガ窯で暖められた空気で乾燥後、群馬富岡の製糸場に運ばれたのかもしれない。



蚕糸乾繭所跡にあったボイラーハウス

7. 本町道祖神社

観音寺裏から小道を100mほど西へ行った所に、杉の木が4～5本立っているその根元に、鳥居と奥に小さな祠がある。祠の中には塔婆形の石に道祖神と彫った石塔が10個ほど納められている。これは道祖神を祀った道祖神社である。道祖神は路傍の神で、村の中心や村堀、道辻に立ち、村を守り、子孫繁栄、交通安全の神として信仰されている。このような神社があるこの小道もかつては街道であったかもしれない。



道祖神社内の石塔群



道祖神社

8. 本町八坂神社

道祖神から少し西へ歩いて、左に曲がって行くとまた本町通に出る。その通りの向側に八坂神社の、こじんまりした境内に、鳥居と社が見える。八坂神社は京都八坂神社を本社とする、牛頭天王を祀った神社で、ここでも真夏の8月初め、周辺の町内会によって祇園祭が賑やかに行われる。しかし、同社の来歴は不明で、

現在の社は享和二(1802)年に再建された物と言われる。境内にはこの周辺で出る砂岩が置かれ、よく見ると貝化石が入っている。また社の横には、一回り小さい薬師堂が建っている。



本町八坂神社

9. 上町の道路元標

八坂神社から旧道を西へ行き、旧役場へ行く小道の角に江鶴家があり、その敷地の道路寄りの所に横芝町道路元標がある。花崗岩製で高さ62cm、25cm角の柱柱で、紀年銘は見られず、いつ造立したものか不明である。かつてこの付近に初めの横芝町役場があり、その前にこの道路元標が据えられたという。その後、道路拡張に伴って不要となり、土中に埋蔵保存されたが、水道工事時に掘り出され、現在地に再び建てられ、今に至る。横芝町は明治30年に誕生し、それにあわせてここに庁舎が建てられた。この道路元標はおそらくその直後あたりに建てられたのであろう。



上町の道路元標

10. 文化財収蔵庫

道路元標のある小道を抜けると、国道を挟んだ向かいに旧横芝町役場がある。ここは平成18年の合併まで役場庁舎としていた建物で、合併後、空いた建物を利用して、現在は文化財の収蔵庫として利用している。この建物本体は昭和34年に造られ、その後、建て増しが行われ、現在の姿となっている。もう建って50年以上経つが、平成23年の東関東大震災ではびくともしなかった。現在の収蔵庫には、埋蔵文化財、民俗資料、絵画、参考図書などが収蔵され、また、見学もできるようになっている。また、土器作りや勾玉作り等の、体験学習もできる。



旧横芝町役場を利用した文化財収蔵庫



縄文時代展示室



民俗資料



考古資料の入った棚

11. 上町如意輪様

旧役場の建物の間を抜け、裏に出て右手の踏切を渡って、すぐ右側に祠が建っている。中を覗くと頬杖を付いた石仏が2体安置され、多くの卒塔婆が立てかけてある。石仏はその形から如意輪観音で、右側の物には「亮讚童女享保十四己酉十月四日」、左には「十九夜上宿講中 寛政元年十一月吉日」とある。別名十九夜塔とも呼ばれ、地域の女性が集まつて、水子や幼児供養を行う為に立てた石仏である。ここでは集まって供養をする講を、如意輪講と呼ばれた。右の石仏は、特に幼くしてなくなつた子を供養する為に立てたのであろう。



小堂の中の如意輪観音

12. 上町T字路周辺の町家

上町のT字路周辺には商家建築の豪壮な町家が、今も10数軒ほど残っている。中には今も商いを生業としている町家もある。ここは松尾八田の金比羅様に近く、その門前町であった名残と言われる。今でこそ正月10日と10月10日しか賑わわないが、昔は毎月10日が参り日（縁日）で、毎月その日は近郷近在からの参詣客で賑わったという。また、ここは銚子往還と多古道との分岐点で、人の往来も多かったのだろう。こうした金比羅様の参詣客や旅人を当て込んで、周囲には多くの商家が立ち並び、横芝の町はここから発展していったのだとも言われる。今はわずかに洋服の仕立て屋さんや呉服屋さんなどが往時を偲ばせてくれる。



上町交差点付近に今も残る昔ながらの町屋

13. 上町T字路の道祖神

上町T字路の南側の駐車場の中に、石祠が鎮座している。前に置かれた小さい石に道祖神と彫られているので、道祖神を祀った石祠である。元々道路脇にあったと思われるが、邪魔にならないここに移されたのであろう。



T字路前の道祖神石祠



路傍の消火栓

14. 路傍の消火栓

この上町や多古へ行く県道沿いに、写真のような砲弾形の赤い消火栓が見られる。これは地上式消火栓で、最近では地下式が多くなったため、ほとんど見られなくなったが、この辺ではまだ何基も見る事ができる。古い町並みには、よく似合う路傍の置物の一つである。

15. 上町町堀の庚申塔

上町T字路からさらに西へ、町家が途切れる所に右へに入る小道があり、そこを曲がるとすぐ右側に庚申塔が3基並んで立っている。中央と左は青面金剛という怖そうな像が彫ってあり、右は「供養塔」と字が彫られているが、上部が欠損しているため、何の供養塔か分からぬ。

庚申塔は、庚申(かのえさる)の日に人々が集まって飲食する庚申待あるいは庚申講を記念して建てた石塔である。庚申待はこの日に体の中に住む三尸の虫が、夜眠っている間に出て、天帝にその人の悪行を報告するという。それを阻止するために、夜中寝ずに過ごす行事である。中国から伝わった道教思想から発し、古くは平安時代に始まったと言われ、江戸時代になって盛んになったと言われる。室町時代は板碑が建てられたが、江戸時代になると青面金剛と三猿が彫られ、その像の恐ろしさから邪鬼を祓うと考え、村の守り神としてその入り口や辻に多く建てられる様になった。町内には中台大宮神社前の庚申塔が町の有形文化財に指定されているほか、多くの庚申塔がある。



上町の庚申塔

16. 横綱小錦八十吉の墓と大師堂

上町の庚申塔からその先の角を右に曲がり、戻る様に東へ歩くと、少し小高くなった所の右側に消防車があり、そこを入ると墓地が見えてくる。その墓地の一一番手前に立つ墓石が、第17代横綱小錦八十吉のお墓である。小錦は慶応三年(1867)年、当時の上宿(上町)で、岩井弥市の長男として生まれ、高砂部屋に入門、明治29年、横綱となつた。49歳で他界、故郷のこの地に眠る。



上町墓地脇の大師堂



小錦八十吉の墓

小錦のお墓の手前右側には、小さいお堂があり、大師堂の扁額が掛けられている。お堂の右手前には浮き彫りの六地蔵が並び、元々お寺があったと思われる。

17. 浅間神社と杜

多古へ行く県道に出て、左に行きクリーニング店の手前を右に曲がるとその先にこんもりとした小山の森が見える。この森が浅間神社の森と呼ばれ、椎の木の極相林で覆われ、町の天然記念物に指定されている。

極相林とは、その
地域の植生の行き
着いた姿の森で、
安定した姿を示す。

森の小山の頂上
には浅間神社が鎮
座し、その周りに
は椎の巨木が茂っ
ている。また、山
の麓の周囲には、
石仏や拜所があり、
山全体が聖なる地
となっている。



南側から見た浅間神社の杜

18. 古川の石合大師と砂岩層

浅間神社の森の南側を抜け、東側に出ると北にもう一つ小高い丘が見える。この上に多くの石造大師像が並び、丘の中央にお堂がある。ここを古川の石合大師と呼ばれ、四国八十八箇所を模して、八十八の大師が建てられている。この大師様を回って拝めば、四国八十八箇所を回ったのと同じ御利益があると言われた。しかし、今はあまりお参りに来る人がい



石合大師正面



石合の砂岩層露頭

この砂岩層は非常に硬く、おそらく100万年以上前の上総層下部の地層が地表に露出したもので、栗山川川底から成東の浪切不動の所まで、点々と分布する。町内でも各地の神社の手洗石や墓石、庭石などに見る事ができ、中には多くの貝化石が入っている事もあり、今もって不明な点が多い、謎の岩石である。



砂岩層の中に入っている貝化石

ないと見えて、荒れ放題になってきている。

石合大師のある丘の県道側に崖が見え、そこで丘を形成する砂岩層が露出している。この砂岩層から石合という地名が付けられた。

二. 坂田池から寺方台地・取立

古川石合から県道を多古に向かって進むと、左側に広い水面が見えてくる。これは坂田池と呼ばれ、今は護岸整備され、人工池のようだが、元は自然の沼であった。この池を背に、正面を見ると山が迫り、その奥に隆起が続いている。これが町の北部を占める下続台地で、ここから台地を上ったり、下りたりする道程が繰り返される、大変であるが、変化のある道のりである。

まず、細長い山の先端を上がるに、そこは戦国時代の城跡坂田城跡があり、台地の上を北へ向かっていくと果樹園と梅園が続き、新しくできた銚子連絡道路を跨ぐと、古墳があつて、遺跡の宝庫である。これからこうした遺跡や史跡も、訪ね歩く事にする。



19. 坂田池

坂田池は元々入り江が取り残されてできた沼で、今でこそ周りが整備され、周囲を散歩するのが楽になったが、かつては葦や蓮が生い茂る自然豊かな所であった。九十九里地域は昔から慢性的に水が不足し、為に江戸時代はじめから、この坂田池も用水のため池に使われていたと言われる。昭和50年代には房総導水路の調整池として造成され、さらに平成に入って池の周囲を公園として整備されて、現在に至っている。

先年、池の北側に中学校を造る際掘削したところ、土中から蓮やジュンサイが芽を出した。これらは元々坂田池に生えていた植物で、貴重な原生植物として、公園に設けられた湿生植物園で育てられている。



坂田池と坂田城跡



明治時代に撮られた坂田池



明治の坂田池畔に生えていた八代生の松

20. 坂田城跡下の水神様と弁天様

坂田城跡下の県道と大総新道とが交わる角に、鳥居が立ち、その奥に祠がある。その祠に水神様と弁天様が祀られている。水神様も弁天様も共に水辺の神様で、ここに祀られているのは納得する。祠と山の間が低くなっていて、元は島の様であったかもしれない。



水神様の鳥居

21. 坂田池公園湿生植物園

坂田池公園には、元々この坂田池に生えていた貴重な植物を遺し、多くの町民に鑑賞してもらうために造られたのが、この湿生植物園である。植物園には、篠本湿原から移植されたミズチドリやノハナショウブ、コウホネなどが夏、可憐な花を咲かす。また、近くで植生していたオニグルミも、脇に植えられ、昔の名残を示している。



湿生植物園



ミズチドリ



オニグルミ



ノハナショウブ

22. 坂田城跡

坂田城跡の麓を西側に廻り込むと、城跡に取り付く道があり、ここから城跡の上へ登る事にする。

坂田城跡は、県内でも有数の戦国時代の城跡で、はじめは千葉氏が築いたと言われ、次いで15世紀には千葉氏庶流の三谷氏が入り、弘治元(1555)年、山室氏の客将であった井田友胤によって奪われ、その子胤徳によって戦国時代城郭として大幅に改修され、今日遺されているような姿となった。井田氏は千葉氏の家臣としてこの地の領国經營に当たり、永禄年間には里見氏配下の正木氏が東總乱入した時、坂田城も防戦したと言われる。天正十八(1590)年、豊臣秀吉の小田原攻めでは、北条氏に属したため、坂田城は開城し、破却となった



坂田城跡空中写真（南西側から）

城主の井田胤徳は浪人した後、徳川家康の5男武田信吉に仕官、水戸に移り、信吉死後水戸に入った徳川頼房に再仕官し、水戸藩士として暮末、今日まで続く。

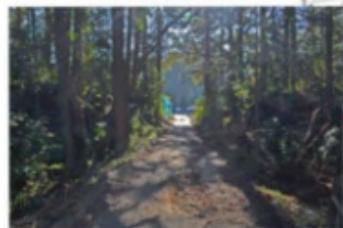
坂田城跡は、標高30～35m、台地上幅約100m、長さ500mの台地を輪切りする様に堀で区切った、典型的な直線連郭式の城郭で、二重堀切、横矢掛など戦国期特有の設備を有している。しかし、現視認では堀には堀底仕切は確認できない。先端の左郭が主郭で無城と呼ばれ、北側に土塁を背負い、そこに御主殿が建っていたと思われる。右側が見台で馬出し曲輪の機能を有していたろう。次の北側の曲輪は登城と呼ばれ、二の丸的な区画であろう。この曲輪の東よりに姫塚という小土盛りがある。坂田城開城の時、敵将に下るのを拒んだ城主の姫が自刃し、哀れんだ家臣が埋葬した所ともいう、地元の伝承がある。



板碑



大手口



二の門



姫塚



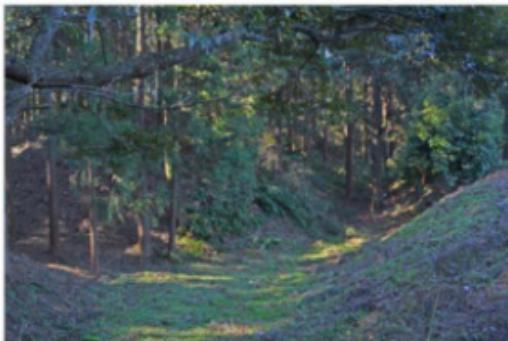
御主殿口



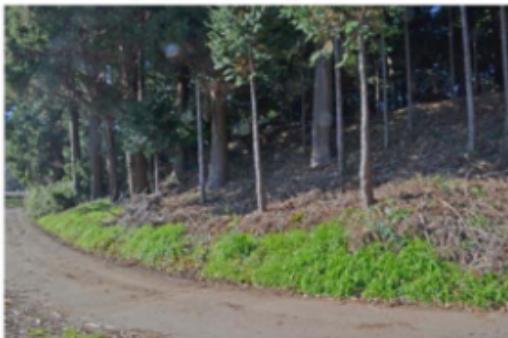
坂田城跡の構造

台地の中央を走る農道を北へ向かうと、2本目の土壘と堀に当たる。これが二の曲輪と三の曲輪を隔てる堺で、現在の道の所が当時も出入り口としてあったと思われ、その両側の土壘は北側へ張り出し、堀はコの字に曲がって、横矢掛構造となっている。三の曲輪を200mほど進むとまた土壘にぶつかる。この三の曲輪は2haほどの面積では平坦で、おそらく家臣団の屋敷が並んでいたと考えられる。

その中央部の西縁を昭和57年、千葉県によって発掘したところ、堀らしい溝が確認されたが、そこはおそらく城下へ下りる道であったろうと推測される。三の曲輪の北辺は土壘が2重に造られ、道も東よりに曲がっている。二重土壘の間にある堀は深くV字になった薬研掘で、また台地もここで少し括れ、ここが城の内と外とを分ける堺である。ここの中側の土壘は、今この道に沿って少し曲がり、この道の部分が当時の大手口と思っていいだろう。しかし、外側の土壘の東寄りに切り込みがあって、そちらが出入り口であったと思われる。いわゆる喰違口となった構造であろう。



主郭と二郭の間の堀



三の曲輪北側の土壘



この堀の外側土壘の東斜面には、土壘を背に板碑が立っている。この板碑は黒雲母片岩製の下総型で、中央にキリーグの種子が彫られている。

大手口の喰違口

23. 寺方古墳群と
24. 梅林

坂田城跡から北へつづく台地の上には古墳が多数あり、寺方古墳群と呼ばれた。しかし、開墾や道路建設によって無くなり、今は数基残るのみである。平成14年から翌年に掛けて、道路建設に伴って



梅園の中にある古墳

台地の括れた所が発掘調査され、古墳16基と同時代の住居跡27軒、それに旧石器時代の石器が出土した。住居跡は古墳前期末から中期、

古墳は中期後葉から後期で、居住後に古墳を築造している。墳丘の残る古墳からは、埴輪や鐵鎌等の副葬品が出土した。

旧石器時代の石器は、関東ローム層の赤土の中から出土し、ナイフ形石器や楔形石器、石刀などがあり、今から2万5千年ほど前のものになる。

今はこの所に道路が通り、その上に橋が架かり、

栗山川から九十九里平野を見渡せる眺めのいい所となっているが、ここに遙か昔から人々が来て、同じ風景を見ながら生活していたことに思いを馳せるのもいい



調査中の寺方古墳群の空中写真



出土した旧石器



調査中の7号墳

かもしれない。

橋のすぐ脇にも前方後円墳が残り、梅の木が植えられ、花の季節には花見客でにぎわう。普段静かな坂田の山も、この時だけは、華やいだ雰囲気になる。坂田の梅園も、老木が目立ち出し、年々弱った梅の木が切れ、少なくなっている。また梅園を維持管理するのも大変で、その担い手も少なくなっているそうで、梅園が少なくなって寂しくなるばかりである。梅園は坂田城跡内的一部、北に向かって城外へ出た所、銚子連絡道の陸橋を渡って台地が広がる所などに点在し、城内のほとんどは梨園や葡萄園に変わっている。

25. 寺方 辻の地蔵

寺方の平らで広い台地を北に向かい、畠が切れる角の右側に丸彫りのお地蔵様が立っている。高さは122cmで、逆になつた台座の上に立ち、頭は一度取れたが、また付け直している。近くに墓地もあり、埋葬者を供養する万靈塔であろうか。この角を左に曲がり、一筋西の道を北に進むと左手にコンクリート製の両総用水吐水槽が見えてくる。



寺方駒山の地蔵

26. 両総用水

両総用水は、利根川の水を千葉県東南部の農地に灌漑する目的で、第2次大戦中の昭和18年から工事が始まり、昭和40年に完成した、総延長78kmに及ぶ水路で、一部は栗山川が利用されている。これは昭和の始め、現大網白里市の旧福岡村の村長十枝雄三が、地域の水不足の解消に利根川の水を引く事を訴えた事に始まったと言わる。現在も用水流域約2万haが潤され、豊かな土地となっている。また、用水は房総導水路としても共用され、その水は房総半島まで延びている。



寺方のかつての取水口

25. 取立十二社神社

両總用水吐水槽の脇を通り、県道に出ると道の反対側のすぐ下に、用水の水路が見え、その規模を伺う事ができる。県道を出た所をすぐ左に坂を下る道があり、そこを下るとすぐ右側に鳥居が見えてくる。道より少し下りて、鳥居を潜り、10mほど先の階段を上ると、鬱蒼とした中に社が佇んでいる。この十二社神社は、天照大神を主祭神とし、國常立命や面足命など、あわせて12神を祀る神社で、さらにその横にもう一つ小さな社がある。社の前には神社境内を守るかの様に、銀杏と桜、楠の樹がそびえている。



十二社神社

26. 取立庚申塔

十二社神社から緩い坂を下っていくと、取立の集落の手前、左側の道脇の少し高い所に、石塔が南を向いて立っているのが見える。振り返って正面を見ると青面金剛に邪鬼、三猿が彫られているので、庚申塔である事が分かる。高さ90cmの安山岩で造られ、駒形の素材に青面金剛が浅く彫られ、向かって右側面には、天明三(1783)年の紀年名が彫られ、江戸中期のものである。

今は塔の周りにブロックで囲まれ、きれいに掃き清められていて、大事にされている事が分かる。そのブロックの間には、宝塔の層輪部分の石部材が挟まっていて、近辺にほかにも石塔が立っていたのかもしれない。さらに坂を下っていくと、取立の集落に入る。



取立坂道の路傍に立つ庚申塔

27. 取立廃寺跡

取立の集落中心のT字路を左に曲がり、少し歩くとまた突き当たりになって、その左に小道があって、その先に石の階段が見える。その階段を10段ばかり上がると、100mほどの開けたテラスがあり、小さな祠と墓石がそこそこに立っている。

取立は現在戸数17軒ほどの町内でも最も小さい方の集落で、村社は先に紹介した十二社神社があるが、寺が今はない。おそらくここが村のお寺であったのだろう。いつ頃廃寺になったのか分からぬが、地元の方に聞いても、寺の名前はおろか、お寺があった事さえも、記憶の中から消えてしまっている。

お寺跡に残る二つの祠には、右に十一面観音様、左にお大師様が安置され、お寺があった事を物語っている。また、階段の上がり口には、お地蔵様や如意輪観音様、読誦塔などの供養塔が並び、墓石ではない事が分かる。



廃寺跡のテラス



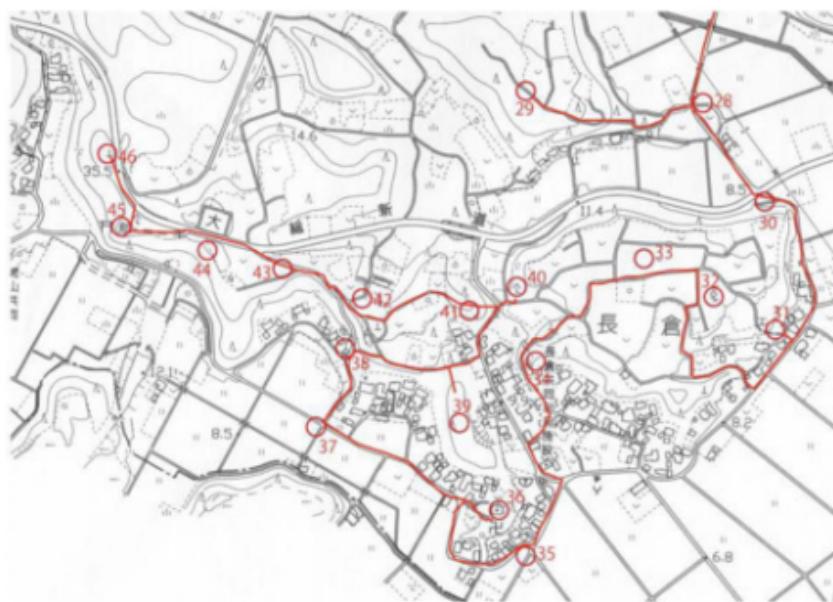
階段上に立ち並ぶ供養塔



大師堂の中にあった
大師像掛軸画

三. 長倉

長倉は坂田城跡がある台地の西に位置し、九十九里平野を前面に臨み、背後の北には丘陵状になつた下総台地が連なる、そのきわに開けた所である。平安時代に著された和名類拾抄にはその名が記され、古くから人々の営みが築かれ、古代の遺跡や中世城郭、神社やお寺など、今も多く見る事ができる。近年では道路の新設や開発などによって、多くの遺跡が発掘され、遠い過去の人々の生活や文化が明らかになってきている。現在の集落は、九十九里平野の最奥部の水田に接し、下総台地のすぐ下にへばり付く様にあり、集落内には寺院が2寺ある。道筋は取立からくる道が、姥山に向かう道と八田へ行く道との分岐点にあたり、田園の中を通って上町へ行く道があったか分からぬ。



南から見た長倉

28. 馬頭観音

取立から長倉へ向かう道を、今走る銚子連絡道の高架をくぐると、道の左側に小さな石仏が半ば仰向けになって立っている。よく見ると、馬に乗った仏様で馬頭観音である事が分かる。高さ54cmの駒形の石塔に馬に乗った馬頭観音が浮き彫りされ、この地域に多い形である。向かって観音の右肩には

「西國秩父坂東」、左には「百番成就之處」、右側面には「文化十四丁丑正月吉日」、左側面には

「願主当村寄進郷中長左エ門」と彫られ、小さいが、年代、造立者が分かる希有な例である。

29. 鍛冶屋台遺跡

馬頭観音の所から道を右に折れ、坂道を上がった所が、鍛冶屋台遺跡と呼ばれ、現在銚子連絡道が通っている所が、その建設に先立ち、平成15年に発掘調査され、旧石器、弥生から平安、室町の各時代の生活の跡が出土した。

旧石器時代では、約3万年前の石器が出土し、既にその時代にここに



長倉路傍の馬頭観音



鍛冶屋台遺跡の空中写真

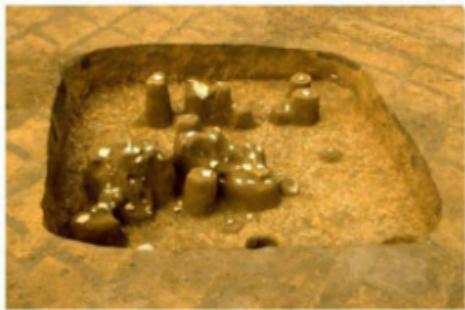
人類が足跡を残し、生活していた事が分かった。石器は黒曜石や安山岩の石刀、砂岩製の局部磨製石斧などで、4箇所の遺物集中地点から出土した。この中で特に石斧は、日本の旧石器時代で最も古い文化の所産である事が分かっていて、その広がりが、この町にも存在した事を示した資料である。

縄文時代は陥穴（落し穴）が9基、検出したのみであった。

弥生時代になると、その終わり頃（後期）の住居跡が13軒検出され、土器などの遺物も出土し、集落が形成されていた事が分かった。住居跡は床が地面を掘り下げた竪穴で、5本の柱と炉（いろり）を備えた簡単な構造で、上に茅を葺いて雨露を凌いだのであろう。土器は南関東系と呼ばれる物と、北関東系と呼ばれる2系統の特徴を有している物が、混在して出土した。



鍛冶屋台遺跡出土の旧石器



弥生時代の住居跡



弥生時代の土器
(上段が南関東系、下段が北関東系)

古墳時代では中・後期の住居跡が81軒検出され、一大集落が形成されていた。住居の構造は弥生時代と変わらないが、後期になると炉から竈(かまど)に変わり、調理施設が格段と進歩した。土器は形が一様になり、文様はないが、赤く彩色した物が多くなる。そのほか勾玉等の装身具も出土した。



古墳時代後期の住居跡



後期の土器群

奈良・平安時代では、住居跡が14軒、掘立柱建物跡が2棟検出され、室町時代では掘立柱建物跡26棟、基坑45基、粘土貼土坑13基などが検出されたが、出土陶磁器が少なく、年代は不明確であった。その中である土坑から茶白の下白が無傷で出土し、目を引いた。本遺跡は坂田城跡に近い所から、そこに関係した武士等が住した所かもしれない。



茶白の出土状態と茶白下白

30. 下北田辻の聖観音

取立から来る道が大総新道に交わり、その道を渡った右側正面の台地取り付きの所に、聖観音の丸彫像が立っている。高さ76cmで、まだ立ってそう年月は経っていないようである。



下北田辻の聖観音像

31. 子安の地蔵尊

台地の裾を廻る道を南へ行って、右側の2軒目の民家をすぎた所に、台地に上がる小道がある。そこを入って少し上がると、右側にお

地蔵様が2基並んで立っている。

左側のは舟形に浮き彫りした高さ85cmの像で、首の部分で割れている。向かって右肩に「上総國長倉」と刻まれ、造立年はない。

右側は柱形に浮き彫りされた高さ76cmの像で、向かって右肩に

「正覺良善童子位 昭和二十四年一月二十四日死」左肩に「昭和二十四年三月建立 柳橋安雄」とあり、子供の供養塔で、昭和24年に建立した物である事が分かる。



子安のお地蔵様

32. 長倉古墳

子安の地蔵尊から、また台地裾の道を南西に歩き、長倉東のバス停留所の所を右に曲がって坂を上り、坂の途中で右に上がる道をまた右折して台地を上がっていいくと、右側の畑の中にこんもりと盛り上がった土饅頭が見えてくる。これは長倉古墳と呼ばれる、古墳時代のお墓である。径8m、高さ2.5mの円墳で、大きさの割には高く、周りを畑にするために削られてしまったと思われる。古墳は1基のみとは限らず、消えてしまつた古墳がまだあったかもしれない。この台地からは東に寺方の台地がよく展望できる。



畑の中の長倉古墳

33. 長倉荒久台遺跡

長倉古墳を右に望みながら台地の頂部に上ると、平らな畑が広がっている。足元を見ると細かくなつた土器のかけらが無数に落ちていて、ここが遺跡である事が分かる。平安時代に編まれた「和名類拾抄」には、既に長倉の郷名が記され、おそらくここがその長倉郷の中心地であった事が考えられる。昭和56年には台地中心部の一部が発掘され、古墳時代から平安時代の住居跡が発見されている。今はひなびているが、昔は多くの家が建ち並ぶ賑やかな集落があつた事が想像される。



畑が広がる長倉荒久台遺跡

34. 長倉患光院

長倉荒久台を西に歩いて少し坂を下る所を左に折れ、茂みの間を入っていくと墓地が見えてくる。その間を抜け、空が開けると左側に瓦屋根が見える。これが患光院と呼ばれるお寺で、本堂は集会所を兼ねて新しい。真言宗智山派の寺院であるが、創建、由緒などは不明である。脇には小堂が2軒並び、中にお大師様と如意輪観音様が安置されている。

患光院本堂と小堂



石造の如意輪観音と地蔵

木造のお大師様2体

35. 長倉南の道標

患光院から坂を下り、集落を抜けて長倉共同利用施設前の道に出て、田園を前面に見る所を右に曲がり、南西に向かうと三叉路に当たる。その三叉路の別れ際の所に四角柱の石碑が立っている。これは道標と呼ばれ、道しるべである。ここはちょうど姥山へ向かう道と、松尾八田へ行く道の分岐で、その行き先を示したのである。石碑の東面には「此方坂田横芝大統村役場木戸台谷台」南面に「此方八田松尾成東」西面に「此方姥山達山中台小池」北面には「大正四年四月長倉報徳社」と刻まれている。今からちょうど100年前に立てられた道標である。



長倉南の道標

36. 長倉長勝寺

この長勝寺も真言宗智山派で、おそらく江戸期建立の本堂が、今も宇をたたえているが、今は無住となっている。その本堂の正面に小堂があり、中に立派な台座の上に石造のお大師様が安置されている。その大師の石の台座に「安政二年」と刻まれている。また本堂の東側には、割竹を巻いた芯が抜かれた丸太が2本置かれている。これは打ち上げ花火の筒で、近くの方に聞いた所、昔、村の祭で長勝寺と恵光院とで競って花火を打ち上げたという。



長勝寺本堂



本堂脇の打ち上げ花火用の筒



小堂のお大師様

静まり返った長倉の集落に、昔、勇壮な祭が行われていた事など、今となっては想像できない。

37. 長倉宮ノ下十字路の道標

長勝寺を出て西に向かい、十字路になった所の左側先の電柱脇に、小さな石碑が立っている。見ると此方云々とあるので道標である。来た方の東側には「此方横芝坂田八日市場」、南側には「蕪木金尾八田」北側には「姥山遠山中台」西側には「大正四年四月 長倉報徳社建」とある。



宮ノ下十字路の道標

38. 長倉御手洗坂路傍の石祠

長勝寺を出て西に向かい、十字路になつた所を右折し、坂を少し上がつた二又になつた道の左脇に石祠がある。祠の中に御幣が掲げられていて、今も信仰されている事が分かる。しかし、お札がないため、どのような神様を祭っているのか不明である。左側面に「口永六口吉日」右側面に「伊藤半右衛」とある。



御手洗坂路傍の石祠

39. 長倉城跡

御手洗坂の石祠からまたちょっと坂を上ると、右に入る道があって、そこを折れ、右に緩い坂を下つて行く。その下り坂の右側が長倉城跡である。藪が茂つていてなかなか入れないが、上がってすぐ堀切があり、それを越えて行くと平場があり、尾根状の台地に造られた小さな中世城郭である。伊藤一男(2005)によると、坂田靈通寺過去帳に「三谷藤四郎胤良蓮空—長倉殿」が見え、16世紀初めの三谷氏の城と推定される。



長倉城跡



長倉城跡の堀切



城内に埋もれる石祠

40. 荒久台の招魂社

長倉城跡を右に見ながら坂を下ると広い道にて、そこを左に曲がり、坂を上がった峰に右に行く道があり、そちらへ入って少し行くと左側に鳥居が見え、それに招魂社の扁額が掲げられている。その事から戦争で亡くなった方の靈を慰めるために、建立された神社である。鳥居をくぐると石灯籠があり、その柱に蛙が彫られているのは、建てた人の思いが伝わる。



石灯籠の蛙



荒久台の招魂社

41. 長倉権現の石碑

荒久台招魂社からまたもど来た道を戻って、少し広い道を渡って人独りが歩けるような道を上がって行く。その土手には秋、青く小さな釣鐘人参の花が見られる。



土手に咲く釣鐘人参の花



権現の林の中に立つ石碑

道を上がりきった所で、左側の藪に入ると、10mほどの平場の中央に、右の写真のような石碑が立っている。よく見ると表に「十二所神社舊蹟」、裏面に「昭和十一年建立 柳橋中郎」とある。これからここに昔、十二所神社があり、地元の方がそれを標すためにために建てた石碑である。

42. 長倉権現 野中の石仏

十二所神社舊蹟の所から、道を西へ向かうと左側に墓地があり、そこから少し目を北東に遣ると、野の中に壊れかけた石仏が立っているのが見える。近くへ行ってみると、舟形にお地蔵様を浮き彫りした像で、中ほどで横に割れているが、かろうじて載っている。像の向かって右肩に「三界万靈塔世之母」と読める文字が刻んであるところから、万靈塔で埋葬者を供養するため、墓地の入口に建てられた石塔である。



長倉権現はずれの石仏

43. 長倉宮ノ前の庚申塔

石碑の所から小道を西に進み、墓地を過ぎて南から来る道と合流して、さらに西へ行くと大綱新道が見えてくる。その手前の左側に憤怒の形相をした石仏が立っている。

台座には三猿が彫ってあり、庚申塔である事が分かる。駒形で日月に青面金剛がはっきりと浮き彫りされ、野天であるが像はよく残っている。高さ82cmの安山岩製で、東の長倉集落の方を向き、右側面には「寛政八辰 十月吉日」左側面には「願主惣村中吉之助 四之助左工門」とある。村の守り神として、村を揚げて建てたのであろう。今は後ろに大綱新道が通っていて、新道から来る災厄から村を守っている様に見える。しかし、その先に長倉大宮神社があり、神社の神様は村に福をもたらすので、両者の関係はよく分からぬ。そう言えば横芝には、よく神社の前に庚申塔が立っている。



宮ノ前の庚申塔

44. 長倉宮ノ前・宮脇遺跡

庚申塔の所から大綱新道に出ると、すぐ銚子連絡道と交差する陸橋の所に当たる。ここは大宮神社の前に当たり、大綱新道を造る時に神社の脇を発掘、そこを宮脇遺跡と言い、銚子連絡道を建設する時に神社の東側を発掘、そこを宮ノ前遺跡と呼ばれたが、同じ続きの遺跡と言っていい。そこからは旧石器時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構、遺物が出土し、貴重な資料を提供した。中でも弥生時代では、縄文から弥生時代に変わる時の土器が出土し、その変化のあり方を示している。古墳時代では、神社との関係を示すよ



長倉宮ノ前遺跡



旧石器時代の石器



弥生時代の玉



弥生時代の土器



古墳時代の住居跡



古墳時代の土器

うな土器が出土していて、大宮神社が創建された年代を推す事ができる。奈良・平安時代では、住居跡が80軒近く、掘立柱建物跡が44棟見つかっていて、長倉郷の一端であったかもしれない。



平安時代の住居跡とそこから出土した須恵器の大甕

45. 長倉大宮神社

大総新道を少し西に行くと左側に鳥居が立ち、鬱蒼とした杉林の中に社が見える。これが長倉大宮神社で、祭神は大国主命で、大同元(806)年の創建とされる。大国主命は別名大物主命、あるいは大己貴命とも呼ばれ、その本社は奈良大神神社である。大神神社こそ今も残る最も古い神社である。その事を考えると、この神社と前面に広がる遺跡との関係がクローズアップされる。

神社の今の外側の建物は覆屋で、中にある神明造りの建物が本殿である。覆屋の右側には、小さな祠や石像などが並び、ほかに多くの神様が祭られている。石像の中には、古そうな狛犬の頭らしきものもあり、その古さを物語る一つである。



長倉大宮神社本殿覆屋



覆屋の右側にある小祠群

46. 長倉千部塚経塚

大総新道を少し西へ行くと、左側の林の中に盛土が見えてくる。これが2基在った長倉千部塚経塚の残り1基で、もう1基は大総新道を造るとき、無くなってしまった。

経塚とは、淨土信仰で自分が極楽往生できるよう、教典を塚に埋納祈願したものである。平安時代に始まり、長倉の経塚は、発掘で出土ものから江戸時代前期と判明した。

発掘した経塚の中 心部から、銅製和鏡2面と鉦鼓、銭貨、土器小皿、それに鏡に付着してわずかに曲げ物漆器が出土した。決して高価ではないが、当時のこの地域としては、かなり財力を有する者がこの経塚造りに関わったと思われる。ここは道路ができた後、不可解な事がたて続々に起こり、今も異様な雰囲気を醸し出す、町の中のパワー スポットのひとつに数えられる。



今も残る経塚



発掘途中の経塚



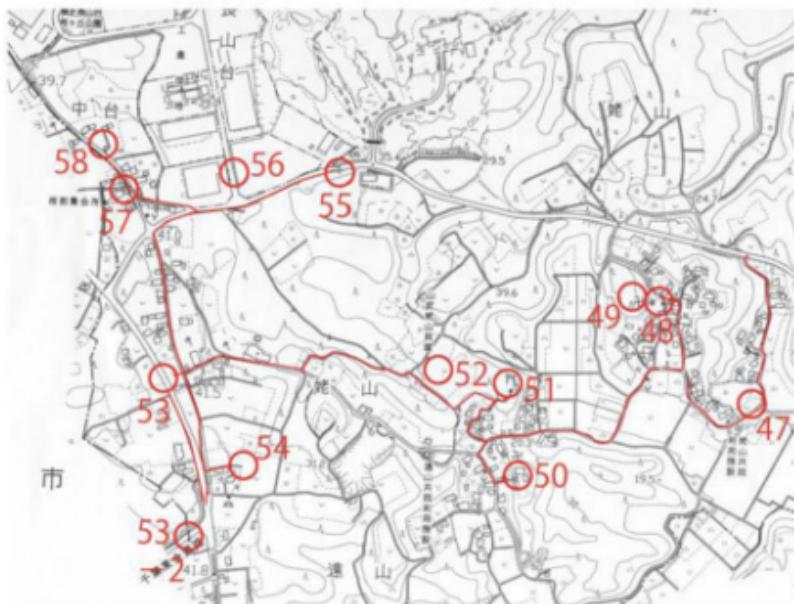
出土した時の鉦鼓と和鏡



出土した経塚遺宝

四、姥山・遠山・桜前

長倉の西に隣接する姥山・遠山・桜前は町の西端部に当たり、下締台地の中ほどに入り、丘陵状となった山と、生い茂った山林となる。姥山、遠山の集落は台地の間の谷津に沿って展開し、桜前は台地上に松尾から芝山へ貫ける道筋に点在する。この地区の台地は標高が40mを超える所もあり、古い遺跡も点在する。中でも山武市と境を接する遠山四ツ塚では、3万年前の旧石器時代の大規模な遺跡が発掘され、また、姥山では九十九里浜沿岸で最大規模の縄文時代の貝塚がある。しかし、新しい方では少なく、お寺や神社などの信仰の場があるぐらいである。また、近年の開発によって、工業団地やゴルフ場が造られたのも、この地域の特色である。



谷津に点在する姥山・遠山集落

47. 姥山参拝記念碑

長倉の大宮神社から大経新道を西に向かい、姥山入口の看板の所を左に入り、道を下って行くと谷津田に出た突き当たりの右角に石碑が立っている。表の碑文には「伊勢高野山四國宮嶋口東大寺参拝記念」右側面に「北町原多古道」左側面に「東長倉横芝道 西遠山芝山道」裏面に「大正十三甲子年奉 土屋勝太 土屋儀一」とあり、道標を兼ねた高さ85cmの参拝記念碑である。しかし、これに刻まれたとおりに参拝したとなると、西国一円の有名な神社仏閣を廻った事になり、大正時代では大変な旅行であったろう。



記念碑文



路傍に立つ参拝記念碑



姥山辺の道祖神社と放光院

48. 姥山道祖神社

参拝記念碑から道を右に廻り込み、再び集落の間の緩い坂道を上がって、左に折れた先の左辺に覆屋の中に入った社がある。中の本殿はこの地域では珍しい入母屋造り、屋根部分だけがベンガラで赤く塗られている。特に神社名を書いた扁額があるわけがないが、道祖神社と言われ、祭神は道反命（ちがえしのみこと）が祀られている。小さい社であるが、江戸時代の作らしく古びているが、覆屋で守られているため、傷んでいる所がない。



道祖神社本殿

49. 放光院と西國三十三観音霊場

道祖神社の裏を上ると1軒の小さい瓦葺きの建物があり、横には石塔などが建っている。ここは放光院と呼ばれる真言宗のお寺で、今は前述の建物が本堂となっている。そして本堂の左側に裏山へ上がる道があり、その上がり口に、西國三十三箇所霊場入口と彫られた高い石塔が立っている。その山道を上がって行くと、途中に浮き彫りされた石仏が次々と立っていて、像の上には番号が振られ、石仏はそれぞれ異なった観音様である。



三十三観音霊場の入口



6番十一面観音



14番如意輪観音



12番から13番を臨む



16番聖観音

これは近畿2府4県に点在する観音霊場をなぞり、江戸時代に観音巡礼信仰が広まり、明治時代になって西國三十三観音霊場参りの流行によって、この地にも作ったもので、1番から33番まで、近在の村々の善男善女が志を出し合って、石仏を建てたらしい。今も地元での信仰は続いている。

50. 遠山萬福寺

放光院からまた元来た道を戻って、谷津田沿いの道を西に進むと、すぐ遠山の集落に入る。その先の突き当たりを左に曲がると、すぐ左側の山裾に四国霊場の一寺のようなお寺が見える。寺名は萬福寺と呼ばれ、天台宗で本尊は阿弥陀如来である。階段の両側には花木が植えられ、そこを上ると正面に本堂があり、境内はきれいに掃き清められ、石仏が数基並んで立っている。春には様々な花が咲き、花のお寺と言ってもいい。

本堂には蠶糸尊と書かれた扁額が掲げられ、かつてこの地域は養蚕が盛んであったことを物語っている。

このお寺でもう一つ珍しいものが、大切に保管されている。本堂に入ると、左右両側のかも



萬福寺門前



本堂

いに額に納められた額絵が15点掲げられている。この額絵、よく見るとガラスに裏側から描かれたガラス絵で、ガラス絵馬とも呼ばれるものである。内1点には明治39年と裏書きがあり、多くはその頃に描かれたものであろう。奉納者は香取市周辺が多く、おそらくこの絵馬制作者は佐原の方だったかもしれない。



本堂内のガラス絵絵馬



ガラス絵の家族拝み図絵馬

萬福寺境内には、山門を入って右側に石仏が並んで立っている。丸彫りのお地蔵様、浮き彫りの如意輪観音様、文字塔など、様々な供養のために建てられた石仏である。お地蔵様は現世利益のため、如意輪観音は安産、子育て祈願、水子供養などの十九夜塔、文字塔は修行でお経を読み上げた成就記念などである。また路傍にあった石仏が、お寺に寄せられてくる事もあり、石仏をよく見ると、それぞれその歴史を有している事が分かる。



萬福寺境内の石仏群



如意輪観音

51. 東山神社

萬福寺から三叉路に戻り、そこから元来た道を少し戻ると左に入る小道があり、折れ曲がりながら坂を上がって行き、登りきった所が東山神社である。覆屋の中に本殿があり、小さい神社で在るが、境内には大きな樅の樹が2本あり、遠くからでも目立つ。祭神は伊奘冉命で、元は熊野神社か



神社本殿



東山神社のある山

ら勧請したものと思われ、地区の鎮守となる、古い社である。

52. 姥山貝塚

東山神社の裏を抜けると、畑が広がっていて、その畑の中ほどが白くなっている所がある。ここが姥山貝塚と呼ばれる縄文時代の遺跡で、千葉県内の太平洋側の貝塚では、最大の規模を有する。この貝塚は縄文時代最後の頃の遺跡としてだいぶ前から注目され、大学や千葉県によって発掘調査されてきた。特に昭和31年以降5度にわたり、慶應義塾大学が調査を行い、ここで特徴的な土器を見いだして、遺跡の名前を採って姥山式と名付けた。平成元年には千葉県によって調査され、縄文終末期から弥生時代に繋がる土器が出土した。



姥山貝塚近景

この様に姥山貝塚は重要かつ貴重な遺跡でありながら、未だ史跡指定になっておらず、保存が危ぶまれるが、できれば史跡公園として整備し、多くの方に見ていただきたい。ちなみに市川市にも同じ名前の貝塚があり、それと区別するため、研究者の間ではこちらを山武姥山貝塚と呼んでいる。



縄文後期の土器



検出された住居跡と遺物



姥山II式土器

姥山II式土器



前浦式土器

安行3a式土器



千網式土器

千網式土器



千網式土器



石鏃



姥山貝塚出土遺物

スタンプ形土製品と円板

53. 遠山天ノ作遺跡

横芝工業団地前から大総新道を西に行き、すぐ芝山松尾道との十字路に当たり、そこを左に曲がり、右にはにわ道が見えるあたりが天ノ作遺跡である。この遺跡をはにわ道を作る昭和58年、発掘調査され、旧石器時代の石器が多数出土した。

石器はナイフ形石器、楔形石器、叩き石、台石などで、特に小さい丸石を割って作った楔形石器は、まとまって出土したのは全国的にも初めてで、叩き石や台石も一緒に出ていたことでその作り方も推定できた。これらの石器は、赤土の中、深さ1mほどのところから出土し、今から2万5千年前ほどのものと思われる。

今日ではこの楔形石器は、近隣の遺跡でも多数出土していて、この地域に楔形石器文化圏が形成されていたことが考えられる。しかし、この楔形石器、遺跡によって使われた石材が異なり、どのように使われたかは不明で、謎の多い石器である。

53-2. 四ツ塚遺跡

天ノ作遺跡から少し南へ行くと、圓央道の入口である。この辺は四ツ塚遺跡と呼ばれ、旧石器時代の遺跡で、圓央道を作る時に発掘調査され、3万年前の環状ブロックが検出された。これは遺物集中地点が環状に並び、一つの集落とも考えられている。



発掘調査中の天ノ作遺跡



ナイフ形石器と楔形石器



叩き石



台石

54. 遠山庚塚

遠山天ノ作遺跡から少し南へ行き、民家の間の道をぬけると、右側の畑の隅に祠があり、その中に石祠が立っている。石祠の上には「庚申」と読め、側面には「天保五年」紀年銘が見える。町内では珍しい石祠の庚申塔で、元々は現在位置から50mほど東の小道の脇にあったもので、そこには小さい庚申塚が数基あったという。道路の建設で移転したものだと言う。



移転した庚申塔の石祠

55. 姥山永作の庚申塔

遠山から県道成田松尾線を北に戻り、桜前の十字路を右に曲がるとすぐ左側に横芝工業団地の工場群が見え、そこを過ぎて少し行くと次ぎにゴルフ場の入口が見える。その坂を下る所の道の右側の上を見上げると、小さな石塔が立っている。正面には「青面金剛 寛政十二年 申四月吉日」、側面には行き先などが彫られている。道標を兼ねた、文字塔の庚申塔である。



永作の庚申塔

56. 横芝工業団地内の遺跡

横芝工業団地は、平成3年、千葉県によって整備され、現在6社が操業している。この工業団地を造成する際に、遺跡の発掘調査が行われ、旧石器・縄文時代の遺物が発見されている。上仁羅台・西長山野・東長山野の3遺跡で、前2遺跡からも旧石器時代では、槍先形尖頭器やナイフ形石器がまとまって出土し、旧石器人が生活していたことが分かった。縄文時代では、同じく2遺跡から陥穴と中期から晩期の土器・石器が出土し、近隣の中台遺跡や姥山貝塚との関係が考えられる。



現在の横芝工業団地入口

57. 道標を兼ねた参拝記念碑

芝山松尾道を北へ戻り、桜前の交差点を過ぎて50mほど行った左側の角に、背丈ほどある石碑が立っている。碑の表には「奉参拝富士大山三峰古峰、東横芝道西山室八街道」と彫られ、山岳参拝記念と道標を兼ねていることが分かる。裏面には造立者名が多数連ね、地域で出し合って立てたものであろう。造立年は大正8年と記され、もう100年近く立つ碑である。碑本体の高さは114cm、安山岩製である。



道標を兼ねた参拝記念碑

58. 桜前大師尊

参拝記念碑の辺からさらに50mほど北へ行った右側に、真新しい板塀で表を囲った小堂がある。お堂の正面には額が掛けられ、「阿州立江寺写十九番 いづかさてにしのすまいのわがりょううごうじぐせいのふねにのりていたらん」と、四國靈場19番立江寺とそのご詠歌が書かれている。お堂の中のお大師様は丸彫りの石造りで、赤い襷が掛けられ、木の台に鎮座している。



大師堂と石造りの大師像

五. 中台

中台は町の最も北西に当たり、北は芝山町、西は山武市に隣接し、町内でも比較的広い区域を有している。地域のほとんどは下総台地が占め、鬱蒼とした山林が広がり、その間を開墾された畠地と、台地を浸食した谷津に水田が細く延びる程度である。しかし、台地の上には古くからの遺跡が多く分布し、今ある集落の中にはお寺や神社もあって、歴史が連綿と続いていたことが伺える。また、殿塚・姫塚古墳のような大古墳や、縄文時代の中台貝塚など、著名な遺跡もあり、遺跡の宝庫とも言える。地区の中心には、大己貴命を祀った大宮神社、真言宗智山派の円福寺があり、それらの周りに町指定文化財の庚申塔や、馬頭観音、地蔵、十九夜塔などの石仏が点在し、人々の営みが形成されていた。それが成田空港の開港によって、騒音対策のもと集落移転が図られ、かつての姿は変わろうとしている。それでも大宮神社で毎年夏の終わりに開催される風祭では、地域の人々が集い、その結束を示している。中でもそのとき演じられる梯子獅子は、町指定無形民俗文化財としての誇りを持って受け継がれている。



59. 中台の馬頭観音

桜前の十字路から芝山松尾道を北へ行き、両側の山林が切れ、民家が見え出した所の右側路傍に、馬頭観世音と彫られた高さ55cmの粘板岩製の石碑が立っている。昭和19年3月の造立年が見え、戦争中に軍に出された馬を供養したものか。この石碑の奥にさらに数基の石碑があることが分かった。ほとんどが横になり、馬乗り馬頭観音の像容塔、文字塔、道標、道祖神などである。これらが元からここにあったか分からないが、表の石碑とを考えると原位置は動いていないだろう。



路傍の馬頭観音碑



山林の中に散乱する石仏



道祖神を祀る石祠



馬乗り馬頭観音



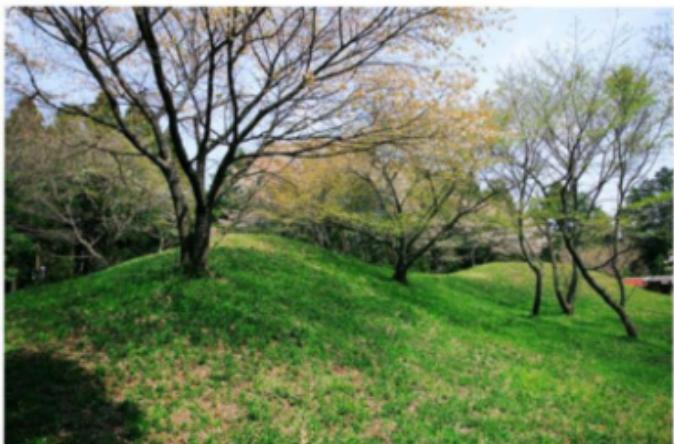
馬頭観音文字塔

60. 殿塚・姫塚古墳

馬頭観音から少し北へ行き、左に入る小道を行って西へ向かい、はにわ道を渡って山林をぬけると殿塚・姫塚古墳に至る。殿塚・姫塚古墳は中台古墳群の中心的古墳で、前者が全長88m、高さ8.6m、後者が全長58.5mに高さが4.8mの前方後円墳である。この両古墳からは昭和31年の発掘調査で、多くの形象埴輪が出土し、その見事さから昭和33年国指定史跡になった。それぞれの古墳から埋葬施設である横穴石室が発見され、太刀や馬具などの副葬品も多数出土した。このほか10基の古墳が周囲にあり、古墳群を形成しているが、これらは未調査で、詳しいことは分かっていない。



殿塚古墳



姫塚古墳

61. 中台貝塚

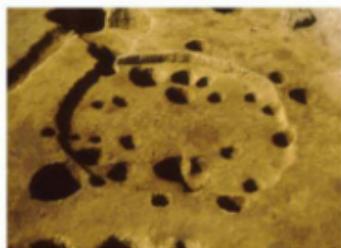
殿塚・姫塚古墳から元来た道を戻り、芝山横芝道の旧道に出て東へ行き、広い三叉路に出た辺りが中台貝塚である。此の三叉路の道路改良工事に伴って、昭和54年に発掘調査が実施され、旧石器時代石器、縄文時代中～後期の住居跡や貯蔵穴、土器・石器が多数出土した。多数の貯蔵穴の中には、貝殻や魚骨などが出土し、当時の食生活の一端を垣間見せている。また、遺物の中には後期の土偶やスタンプ形土製品、大きな石棒などもあり、生活の豊かさを物語っている。



現在の中台貝塚



発掘途中の中台貝塚



1号住居跡



出土遺物

62. 大宮神社

中台貝塚から東を臨むと、すぐ目の前に背の高いこんもりした樹林が迫る。これが中台大宮神社の鎮守の杜で、その中に大己貴命を祀る大宮神社の社がある。創建は定かでないが、周辺の古代遺跡との関連から、古くから鎮座していたと思われる。この神社の境内では、夏が終わる8月最後の日曜日に、台風避けの風祭が催される。その祭の中で、境内の大銀杏に掛けた梯子上で獅子舞が演じられる。梯子獅子は二人で舞いながら、梯子に乗り、逆立ちなどの曲芸をしたり、紙吹雪を撒き、その姿は勇壮である。



大宮神社

県内でも他に数カ所であり、いずれも知られて、本神社もこの時だけは賑やかになる。この梯子獅子は町の無形民俗文化財に指定され、中台地区の住民で構成された保存会で受け継がれ、地域社会の形成、維持に役立っている。



梯子獅子

63. 大宮神社前の庚申塔

県道沿いの大宮神社入口に背丈ほどもある像を彫った石塔がある。これは庚申塔で、町内でも最も像の彫りがよく、状態が良いことから昭和62年に町で有形文化財に指定された。



庚申塔



巡拝記念碑

64. 大宮神社前の記念碑

庚申塔の東側に柱状の石塔が立っている。正面には「西国拝禮記念碑」と彫られ、左右に「成田道・東金道」、裏面に明治15年とある。この辺に多くの巡拝記念碑と道標を兼ねた石碑の一つである。

65. 中台十字路の石塔群

大宮神社前から少し東へ行くと、中台十字路に当たり、そこを左に折れて北に向きを変えると、すぐ右側に古い石塔群が並んだ所がある。その左奥には小さな祠のようなものがあり、中に観音様のお札が納められている。石塔には観音菩薩などを彫ったものや、角柱状のものがあり、云々信士とか云々信女との身寺が彫られ、墓石であることが分かる。こちらの地域では所々に、今では取り残されたような墓石がたまにみられる。



中台十字路近くの墓石群



観音菩薩を祀る祠

66. 橋戸の十九夜塔

中台十字路から北へ向かう道を進み、坂を下りきると谷津田に出て、町境の水路に付くと、その左側に小さな祠がある。中を覗き込むと、顔が風化してノッペラになったが、頬杖を付いた可愛らしい石の如意輪観音様が鎮座している。その横には木の供養塔が立ち、村はずれにありながらも、今も地元から信仰されていることを示している。



十九夜塔を祀る祠



如意輪観音像

67. 中台円福寺

橋戸の十九夜塔からまた道を戻り、山の下の左側に沿った道を南へ進み、坂を登りきり右側を見るとお寺の山門が見える。山門の両側には石仏が並び鎮座している。山門をくぐると正面に本堂があり、左側には小さな方三間堂が草木に埋もれている。このお寺は真言宗智山派の円福寺であるが、無住となって久しく、本尊は失われ、荒れ寺となってしまった。

立派な山門と堂々としたお堂であるにもかかわらず、今は参詣する人も清掃する人もなく、ひっそりとただ佇んでいるのみである。大宮神社の清浄さと祭の賑やかさとは、まさに正反対である。



円福寺正面



本堂



本堂の左奥にある方三間堂



山門右側の石仏群

山門の両側の屋根の掛けた袖壁の中には、石造りの十九夜塔や六地蔵が安置してある。六地蔵は元からここにあったと思われるが、十九夜塔はここに寄せられたものか。いずれも江戸時代のもので、かつてはこのお寺も、信心の深い人々で賑わったと思われる。

68. 円福寺横の熊野神社

円福寺入口の東側の木立の中に、小さな祠が立っている。その入口の県道脇には、不釣り合いな立派な石の鳥居が立ち、祠の廻りは杉木立て囲まれ、日差しを遮っている。祠の中や裏には中世の五輪塔の部分が置かれ、この地域が中世に人々の痕跡があったことを示している。



熊野神社

69. 中台子安神社

小祠の手前の県道から北へ入る脇道を入り、さらにその先の左に曲がる道を行くと、竹藪の中に鳥居が立ち、その奥に社が見える。これは中台子安神社で、子安明神を祀った神社である。外側から見える建物は覆屋で、その中に本殿がある。竹藪に囲まれ、雀のお宿のような神社である。



子安神社

70. 中台畑辻の出征馬記念碑

子安神社から道を戻り、脇道に出て東へ向きを変え、少し進むと三叉路があって、その分岐点の所に木に隠れる様に、四角柱で高さ65cmの石碑が立っている。西に正面を向き、正面に出征馬記念碑と彫られ、裏面に明治28年造立とある。その前年に日清戦争が始まり、この村からも戦争用に馬が徵用されて行ったのだろう。その馬を供養するための石碑なのかもしれない。碑の左側には、北多古佐原とあり、道標を兼ねていた。



出征馬記念碑

71. 中台A遺跡

中台畑辻の道標当たりから県道を挟んだ一帯は、縄文時代の中台A遺跡と言われ、周辺の畑をみると多くの縄文土器が散布している。また、畑の中には回の散布がみられ、地点貝塚があったが、現在は駐車場となってみられなくなっている。この遺跡を平成21年10月に、道路改良工事に伴って一部が発掘調査された。発掘は既存の道の両側、幅1m、長さ70mの範囲で、そこから古墳時代の溝を検出した。古墳時代の溝は断面が緩い台形で、道の両側で弧を描く様に検出され、中から古墳時代の須恵器片が出土し、おそらく古墳の周溝と思われる。ここにも古墳があったのだろうか。

縄文土器は、ほどんど中期に属するもので、周辺の遺跡との関連が考えられる。



調査風景



出土した須恵器片

検出された古墳時代の溝



出土した縄文土器

六. 中台角田から木戸台上笊内

中台A遺跡から県道横芝山武線を東に進み、少し坂を下った左側に角田の集会所がある。この辺一帯を中台角田地区と呼ばれ、10軒ほどの集落が形成されている。ここではさらに東の木戸台、また南の長倉に入る東長山野遺跡なども紹介する。この地域の集落は町内でもまばらで、わずかにまとまる角田以外は、あっちに1軒、こっちに1軒という様に、谷津に接して構えている家が少なくない。話は変わるが、この地域も中台地区に続く様に縄文時代の遺跡が多く、あちこちに今も貝塚を見る事ができる。また、この区域には首都圏中央連絡自動車道が計画されていて、その予定地にも遺跡が確認され、今後の調査成果が期待される。



72. 角田貝塚

角田貝塚は遺跡のある台地の西縁にある斜面貝塚で、写真では後方左の竹藪の当たりにあるというが、今は確認できない。縄文中期から後期で、周辺に土器の破片が散布している。



角田遺跡



伊藤林平頌徳碑

73. 伊藤林平頌徳碑

碑文によると、伊藤林平は中台で生まれ、子供の頃より本をよく読み、知識を身につけたが、足をけがした後、農作業が思う様にできず、為に近在の子弟を集めて教えたという。幕末から明治の頃でその子の融(とおる)も小学校の教員になったという。

明治11年、師の頌徳を讃え、門弟が建てたのがこの碑である。横に林平の墓碑が立つ。

横芝には江戸期からあちこちに私塾が創られ、近在の多くの村人が学んだと言われ、それが幕末に海保漁村を生み、明治の成蹊学舎、今の横芝敬愛高等学校へと繋がっているのだろう。

74. 鴻ノ巣貝塚

鴻巣貝塚は遺跡の東側の一段下りた畑地にあり、畑の中に貝の散布が今も見られる。ここも縄文中期から後期の貝塚で、角田遺跡内の一つの地点貝塚と言べきであろう。こちらは昭和27年に、慶應大学によって調査されたという。



鴻ノ巣貝塚

75. 角田天照大神社

県道から左へ集落の中に入る道を曲がり、少し歩くと右側に祠が見える。中を覗くと小さな本殿があり、その横に文久元年銘と明治35年銘の、天照大神と書かれた棟札があり、天照大神を祀った小さな社であることが分かる。小さなながらも、村の鎮守であろう。



角田天照大神社

76. 牛熊入口の石塔

県道を東へ来ると、牛熊入口と書かれた看板がある角に、石塔が2基立っている。手前が西国三十三観音霊場巡拝記念碑、東側が地蔵座像を浮き彫りした像容塔で、向かって右肩に当村女人像である。記念碑は嘉永元年か、地蔵は弘化三(1846)年であり、江戸後期である。しかし、村はずれのこの場所に、なぜ石塔が2基もあるのか不思議である。



西国三十三観音霊場
巡拝記念碑

地蔵供養塔

77. 木戸台第1貝塚

木戸台第1貝塚は、遺跡の東端の斜面部にあり、今は畑となっているが、貝の散布は斜面に見ることができる。貝塚は縄文中期から後期であるが、平成7年の遺跡西端部の発掘調査では縄文早期の土器が出土している。

周辺一帯は木戸台遺跡で、牛熊入口角の東側には木戸台第2貝塚があつたが、現在は確認できない。



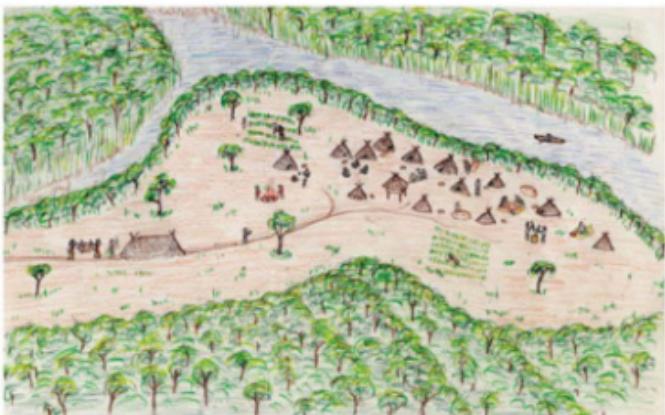
木戸台第1貝塚

78. 東長山野遺跡

角田の集落前の県道から南へ沢沿いの道を下り、谷津に出て南方を見上げると高圧送電線の鉄塔が立っているのが認められる。その鉄塔が立っている山の上に、東長山野遺跡がある。遺跡の大部分は今から30年近く前に、ゴルフ場開発に先立って発掘調査され、縄文時代中期の集落跡が出現した。今は発掘された部分はゴルフ場となっているが、送電線が通る北側の部分は残っている。この時の発掘では、縄文時代の住居跡が約50軒、貯蔵穴が約230基検出され、出土した土器は膨大な量であった。また、石器では石鎌(矢じり)や石斧も多数出土し、当時の生活の様子を推定することができた。



東長山野遺跡空中写真(西側から)



東長山野の縄文中期当時の推定画



中期初頭の住居跡



2軒並ぶ中期最盛期の住居跡



ほぼ円形の住居跡と土器を掛けた炉跡



貯蔵穴群



貯蔵穴に埋葬された甕棺墓

縄文時代中期の住居跡は、多くは丸い平面形で、床を掘り窪め、柱穴を掘って柱を立て、上屋を掛けて住居とした。床面の中央には炉があつて、そこに土器を掛けて食べ物を煮炊きしていた。住居跡の中には、床面に段差を有したのもあり、さらに集会所のような大形のものもあって、それから当時の集落社会が復元できるかもしれない。住居跡の廻りには貯蔵穴が多数据られ、当時の冷蔵庫の役割を果たし、食料が保存、蓄えられていたと思われる。

貯蔵穴や住居跡の中には、たまに人を埋葬した所もあり、本遺跡からは1基甕棺墓が発見された。また、貝殻や魚骨、獸骨も所々で出土していて、当時の動物食が何であったか知る手がかりも得られた。

東長山野遺跡出土の土器

東長山の遺跡からは、中期だけでも膨大な量の土器が出土した。その一部を上から古い順に、ここに掲載した。





石鏃



籠状石器



小・中型の磨製石斧



宝飾品



土器片錘



円板



土偶



石皿



魚骨

東長山野遺跡からは、ほかに下のような奈良時代の住居跡が見つかり、その時代の人口の増加と地方への開拓が盛んであった事が分かる。当時は律令制の制定によって政治が安定し、条里制の施行による大規模な新田開発によって、米の生産が上がり、人口が増加した時代であった。そしてさらに食料の増産のため、地方への開拓を進めたため、本遺跡のようなバイオニア的な集落が各地に形成された。



2号住居跡



東長山野遺跡出土の奈良時代土器



火葬墓の検出状態



火葬墓出土の蔵骨器

左の写真は平安時代中頃の火葬墓で、方形の坑の中央に火葬骨を入れた赤焼須恵器が埋葬され、器の周りには木炭がつめられていた。当時、火葬された人物は僧侶がほとんどで、これも僧侶の墓と思われる。



15号住居跡

左の写真は、東長山野遺跡の西側にあった北長山野遺跡から、検出された奈良時代後半から平安時代はじめの住居跡で、東長山野の後に続くと思われる集落で、大きく2時期に分けられる。

奈良時代初期の土器は、まだ古墳時代の名残を見せ、甕や瓶の器厚は厚く、环の底は丸い。それが奈良時代後期になると、甕の器厚は薄くなり、环は輪郭整形が多くなってくる。さらに須恵器も次第に多く加わってくる様になる。平安時代になると、环の口は広がり、甕は房縦型と呼ばれる胴が丸い形になっている。



15号住居跡出土の土器

東長山野遺跡から出土した土器は、縄文時代中期から晩期まであるが、何と言っても中期が主体となり、その初期を除いて全般にわたっている。その最盛期は中葉の土器の様相が変わる頃に当たる。それは阿玉台式と呼ばれる籠描き沈線文様主体の土器から、加曾利E式と言う粘土紐を貼付け縄文を主体とした土器に変わった頃である。その頃の土器には、地元の阿玉台式と加曾利E式の混ざりあったものだけでなく、西関東の勝坂式や信州の藤内式、新潟の馬高式など、様々な様式の土器がある。石器では石鏃に使われた黒曜石は伊豆神津島産、籠状石器の安山岩は茨城産、硬玉大珠は新潟産と、広い各地から持ち込まれていて、土器とあわせて広い交流や活動があったことを伺わせる。そのほか土器片を再利用した鍤や円板、石斧が多く、石皿、石棒、土偶なども出土した。また、貝に混じって鰐等の魚骨も出土した。

東長山野遺跡の西側にあった北長山野遺跡からは、右写真のような旧石器時代の槍先形尖頭器が出土した。この石器は大きい方で長さ7.5cmあり、両者とも硬質頁岩を使った丁寧な作りで、先端から右縁に長い剥離(割取り)がある特徴で、刃物としても使ったと思われる。このような特徴の石器は、県内で多くの例があり、千葉を代表する石器が本町でも出ている。この石器と一緒に、角錘状石器や瑪瑙製の刀器、石核が出土している。



北長山野遺跡出土の旧石器

79. 吹揚遺跡

東長山野遺跡の東部の台地の山林の中には、右写真の様に盛土らしき地形があり、もしかするとここも、人が残した跡かもしれない。



吹揚遺跡の土盛り地形

80. 向田城跡

県道横芝山武線の牛熊入口の道を入り、少し行ってまた右に入る小道を進み、坂を下って栗山川・高谷川低地の広い田圃に出る手前の、左側の山に本遺跡がある。道から山に入る入口があり、そこを入ると山の斜面にひな壇のような平場があつたり、斜面を上がる小道のような所があり、山の頂部にも土壘のような土盛りと、整地したような平場がある。低い所に現在も民家があり、斜面部の平場も民家があったことも考えられるが、周辺ではひな壇状に集落が営まれた所は見られない。そのようなことを考えると、中世の小城郭であったことが有力であり、知られてはいなかったが、向田城跡とした。この位置は坂田城跡と芝山町の田向城跡との中間地点にあり、その連絡城であったかもしれない。



向田城跡遠景



台地頂上部にある土壘状土盛りと平場(右側)

七. 牛熊・谷台

牛熊は横芝の最も北西部に当たる所に位置し、北には芝山・多古町と接して、高谷川低地に突き出した台地と、その支流谷津に沿って集落が形成され、昔と変わらぬ風景を有している。しかし、牛熊は平安時代には押隈郷があったと言われ、その時代には開けて多くの人々が住んでいたと思われ、その名残として、台地の上には八幡社が鎮座している。この社がある台地は、周辺と比較して平坦な所が広がり、地図を見ても地形が異なっていることが分かる。これはこの台地が下締下位面という地形で、周囲の丘陵状の地形より新しい。このような地形を利用して、古代の人々は開拓を進め、豊かな生活を得て行ったと思われる。

谷台は牛熊の東、高谷川を渡った所の、台地を山陰として谷津に接する所に集落が形成されている。台地の南西端には稻荷神社、その下の集落側には安養院がある。東の山上には城跡があり、また違う歴史の姿がある。



牛熊の台地（北側から）



谷台の集落
(南から)



81. 牛熊馬頭観音

県道横芝山武線の中台と木戸台との境にある牛熊入口から北へ向かい、緩い坂を下ってしばらく行くと、山林が開け水田が広がる谷津に出る。その谷津のむこう正面に牛熊の集落が見え、そこに向かって行き、集落に入る手前を左に曲がり、山裾を北へ行くと共同利用施設がある。その建物の南向かいにゴミ置き場があり、その横の山裾に馬頭観音の石仏が立っている。駒形の石に馬に乗った観音様を浮き彫りし、右側面に享和二(1802)年の紀年銘がある。山際の何も掛っていない石仏であるが、苔も付いてなく、きれいな姿で立っている。

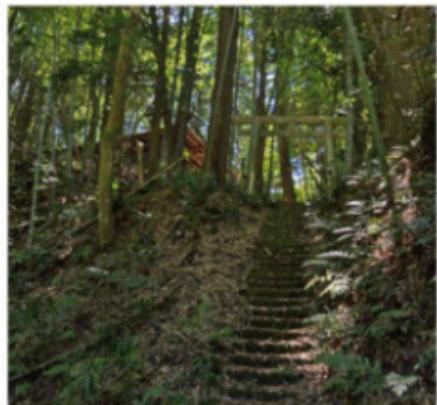


牛熊の馬頭観音

82. 牛熊諏訪神社

牛熊の共同利用施設から北側の集落をぬける道を西に行き、少し行くと右に上がる道があり、その坂を上がり、登りきった所で道が二叉に分かれ、右に行くとすぐ右側に細い階段がある。それを上がると昼直暗い林の中に神社の社がある。この神社は諏訪神社と言われ、長野の諏訪大社を勧請した神社で、建御名方命を祭神とする。

諏訪神社は全国的に分布するが、千葉県内では少ないようである。また、地理的に近く、下總一宮の香取社も決して多くなく、神社の系統別の分布について、よく分からないところがある。ちなみに諏訪社と香取社は同じ系統と考える。



牛熊諏訪神社への階段道



諏訪神社本殿

83. 牛熊薬王寺

諏訪神社から北側へ下り、谷津沿いの道を東へ進み、右に上がる道を登りきると、また左に上がる道を行くと正面に石段があり、それを登つて山門をくぐると薬王寺である。同寺は無住になって久しく、荒れ寺になっていて、本堂は残っているが本尊は失われている。境内の周りにはお地蔵様や大師様などの石仏が残っているが、これらも荒れるに任せている。お寺の裏にも墓地があって、その中に面白い石塔が立っている。一見灯籠のようであるが火受けがなく、六角形でそれぞれの面に仏様が浮き彫りされている。これは石幢と呼ばれる石塔の一種である。



山門と本堂



山門を入ってすぐ左側にある小堂



裏の墓地にある石幢

石幢は、仏堂の中を飾る幡を六ないし八角形に組んだものを幢と言って、それを石で造ったもので、日本では鎌倉時代から始まった。町内では今のところ、町内での石幢はこれと谷中との2基を確認しただけである。

84. 牛熊貝塚

薬王寺裏の墓地を歩くと、縄文土器や貝殻が目につく。おそらくこの範囲も牛熊貝塚の中で、その北側に貝塚がある。貝塚はこの台地の西側斜面にある小さな斜面貝塚で、現在は貝の散布は見えづらくなっている。昭和29年に慶應大学で調査され、縄文後・晩期の土器や石器などが出土した。

85. 牛熊遺跡

牛熊の台地の畑には、縄文時代だけでなく土師器の破片も多数落ちている。おそらくこの地が、平安時代の押隈郷に当たると思われる。東西200m、南北200mの平坦な畑と、北側の緩やかな斜面の段々畑とに、今はなっているが、古代は多くの藁屋根を並べた集落が形成されていたのだろう。



牛熊貝塚（貝の散布は見られないが、縄文土器がある）



牛熊遺跡（右奥の社が八幡神社の鎮守）

86. 牛熊八幡神社

牛熊台地の南東に大きな杉木立が林立する社の中に、牛熊八幡神社の社がある。同八幡神社は大同二(807)年に勅遷、承安二(1172)年に社殿を作ったとされる由緒ある神社である。八幡神社は八幡神(譽田別命、別名応神天皇)を祀り、その本社は大分の宇佐八幡宮である。平安時代後期の武将源義家は石清水八幡宮で産湯を使った(一説では元服した)ことから八幡太郎とも呼ばれ、それから八幡宮が源氏の氏神となり、さらに広がったと言われる。しかし、牛熊八幡の様に実際はかなり早く、応神天皇在世直後の古墳時代後期には既に各地へ勅請されて行ったと思われる。その証しとして多くの八幡社の周辺には、古墳時代の遺跡がある。

本殿は流造でまだ古くなく、前に拝殿があり、西側にある神庫には大きな神輿が納められ、かつては賑やかに祭が催されていた事を想像させる。拝殿の中には、文政十(1828)年銘の絵馬が掛けられていて、源為朝海路を聞く図が描かれ、薄くはなっているが、200年前のなかなか良い絵馬である。



牛熊八幡神社本殿



神庫に納められた神輿

本殿の裏を廻って足元を見ると、土台の礎石の一つに黒っぽい扁平な石があり、よく見ると表面に蓮台を彫っている。これは中世の板碑と呼ばれる石塔である。石は筑波石と呼ばれる黒雲母片岩で、下締型板碑で、元は古墳の石室に使われていたものである。



拝殿に掛けられた絵馬



本殿の土台に使われている板碑

87. 谷台安養院

牛熊の台地を下り、再び南に向かって水田の中央を左に曲がり、高谷川にかかる橋を渡ると谷台である。集落の中を通る道を進み、少し行くと左側に石塔などが建っている所がある。ここが安養院と呼ばれたお寺があった所で、今は堂宇はなく、墓石と小屋、小堂があるだけである。寺跡というべきそこへ上ると、手前に小堂と石塔が数基立ち、奥には墓塔が並び、中には古い墓塔は寄せ集められている。敷地のほぼ中央部に黒色の板石が數枚枯れていって、よく見ると蓮台の彫り物があって、中世の板碑であることが確認できた。これによって、ここにも中世の面影の存在を知ることができた。



石段上の板碑



境内の片隅に建つ大師堂

88. 谷台稻荷神社

安養院からまた南に戻り、台地の南端を西に廻り込むと、先端から山へ上がる階段がある。階段を上がって行くと、途中の右側に石塔が3基立っている。右端は青面金剛と三猿が、中央は庚申の文字が彫られ、庚申塔であることが分



稻荷神社本殿



参道途にある庚申塔

かる。左は石祠である。また階段を上がって行くと、覆屋が掛けられた稻荷神社の本殿が鎮座する。本殿の壁板などには、見事な彫刻があり、いつ頃造られたか分からぬが、宮大工の心意気が伝わってくるようである。

89. 谷台山上

稲荷神社の西側に台地の上へ繋がる道があり、そこを登って行くと、台地の上は畑が広がっている。畑の中の道を北へ進み、平坦なここには縄文・古墳時代の谷台遺跡があり、畑に土器片の散布が見られる。台地を北へ進み、畑が切れて山林に入り、行き止まりに墓地があり、その手前に石の地蔵が立っている。地蔵の台座には「三界萬靈」と彫られ、万靈塔であることが分かる。お墓参りに来たついでに、この万靈塔に死者の供養をするため、この石塔が建てられたのであろう。裏には享和二(1802)年の紀年銘が彫られ、地蔵には大正12(1924)年の銘がある。



谷台台地、畑の中の道



墓地前に立つ万靈塔

90. 牛尾城跡

谷台の台地は北側を多古町の牛尾の範囲になっていて、その台地の南東に突き出て、高い所に牛尾城跡がある。牛尾城は千葉氏庶流原氏の一族の牛尾氏の築城によると言われ、天正十八(1591)年、秀吉の小田原攻めと同時に、庵城になった。城名は牛尾城であるが、西側半分が本町内で、境目の城でもある。

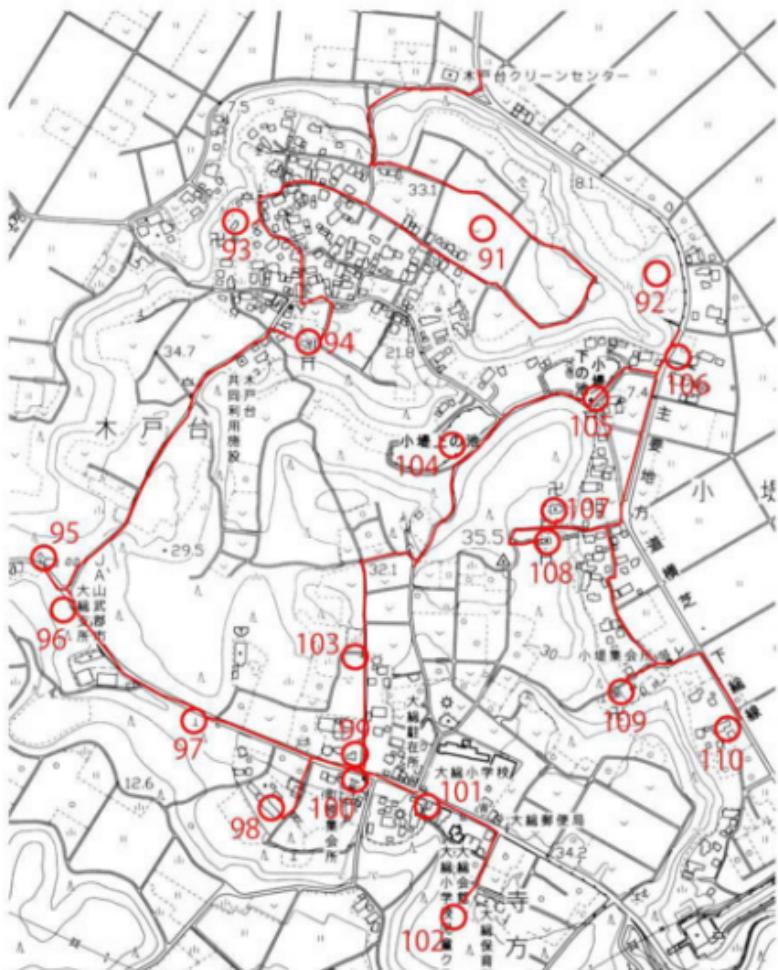


右側の小高い所が牛尾城跡

八、木戸台、町原、小堤

谷台から県道横芝・下総線を南に向かい、高谷川を渡って正面を見る
と木戸台の山が立ちはだかる。木戸台の台地も牛熊と同じ様に、北側に
張り出した台地上が平坦で、下総下位面と呼ばれる地形面に属す。この
平坦面には畠が広がり、また戸数60戸近い農家が集住して集落が形成さ
れている。

町原は木戸台の南、台地の中ほどにあって、小学校や駐在所、郵便局などがある、大綿地区の中心部であるが、集落戸数は30戸程度で、わりと閑散とした所である。



小堤は町原の北、木戸台の東の台地下に形成されている集落で、県道横芝・下総線に沿って、台地と水田の間に家々が立ち並んでいる。集落の北部の台地の間に入る谷津には、町内で唯一の溜池が造られていて、この地区の水田を潤したことだろう。この溜池から北にそびえる台地が小堤要害城跡で、そのほとんどは失われてしまっているが、関東の歴史上重要な事件があった所である。北側から木戸台へ上がる道の土手には、春先、可憐な白い花を咲かす二輪草の群落がある。この二輪草、本来は標高千メートル近い山に生える山草で、こんな低地に生えているのは珍しい。



木戸台の台地（北側から）



二輪草の群落



町原のメインストリート



小堤の集落（東側から）

91. 木戸台上宮台遺跡

県道を南に来て木戸台の山にぶつかったら右に曲がり、さらに左へ曲がり込む様に台地の上に上がってまた左に曲がると、平坦な台地上に畑が広がっている。ここが木戸台上宮台遺跡で、土器片が多数散布している。平安時代の和名類拾抄には武射郡に押隈、理倉、長倉などの郷名が見られるが、この内理倉だけはその比定地が不明となっている。近隣の押隈、長倉から推定すると、木戸台上宮台が最もふさわしい地である。おそらくここであろう。



木戸台上宮台遺跡
の広がる畑

92. 小堤要害台城跡

小堤は後に紹介するが、要害台城跡は木戸台上宮台に続く台地にあるので先に紹介する。小堤要害台城跡は記録で知るところでは15世紀室町時代中期の城跡で、当時関東を揺るがした享徳の乱の時、千葉胤賢が叔父の馬加康胤に攻められ、ここで自刃したという。その後、千葉庶流の三谷氏へと引き継がれた。南北100m、東西50mほどの二重圓曲輪式の小さい城郭であるが、この上に立つと粟山川低地を東から北へ、よく眺望が利く。今は無くなってしまったのは、町の歴史を知る上で非常に惜しい。



小堤要害台城跡(中央の小高い山の右側にあった)

93. 木戸台増福寺

上宮台の畠から木戸台の集落へ戻り、集落の西端に増福寺がある。山門をくぐると草が生え放題の境内の向こうに、方三間堂の本堂が立つ、無住のお寺となっている。本堂の屋根は寄せ棟の瓦葺きで、和様の垂木に出組、桁に付いた獅子形の木鼻など、造りは丁寧で立派である。しかし、荒れ寺の様になつては、さぞかし本尊の仏様もうかばれまい。ちなみに書によれば天台宗で、本尊は阿弥陀如来様である。山門を入つてすぐ右側には、馬乗り馬頭観音の



増福寺山門



増福寺本堂



増福寺境内の馬頭観音

石仏が鎮座し、来る人を見守っている。また、門の前の右側には祠が建っていて、中には馬頭観音の文字塔が立っている。この地区では馬がよほど大事にされたのであろう。

増福寺を出て少し右へ歩くと、古い墓石が並んだ一角があり、狭いところから集落の中の参り基かもしれない。



集落の中の参り基

94. 木戸台大宮神社

増福寺から道を南へ歩き、突き当たりを左に折れ、すぐまた右に曲がって行くと木戸台大宮神社に着く。大宮神社は木戸台の村社で、大同元(806)年に創建されたという由緒ある神社で、大国主命を祭神とする。

現在の本殿が建てられたのはそんなに古い時ではないと思われ、流れ造りの本殿の白木はまだ傷んでない。その板壁には様々な故事にちなんだ絵が浮き彫りされ、これを建てた宮大工の粋が伝わってくる。

かつてはこの神社の境内で、8月5日に風祭が催されていた。女の着物を着た舞い手が、獅子頭を被り、女装の舞い手との軽妙な掛け合いが多くの観客の笑いを誘い、それは賑やかであったという。今は訪れる人もほとんどなく、境内は静寂に包まれている。

境内の右側には5間幅の祠があり、それぞれの柱間に面足神など5柱の神様が祀られた珍しい祠である。また、一つの小さな祠もあり、こちらには大山祇神を祀ってあって、境内には多くの神様が鎮座している。



木戸台大宮神社社殿



本殿板壁の彫刻



5間並びの祠

95. 木戸台入口石塔群

大宮神社の本殿脇をぬけると、集落への連絡道に出、それを左に行くと県道横芝・山武線に突き当たる。その県道を少し西へ行った所に、庚申塔をはじめとした石塔が寄せ集まって立っている。庚申塔は青面金剛を掘込んだ像容塔であるが、他は角柱に文字を入れた文字塔である。その文字塔で最も大きいのは、高さ160cm近くある一番東側の塔で、「奉拝礼 四国八十八箇所」等を刻んだ巡拝記念碑で、造立年は大正3年である。この後に無縁者供養塔があり、庚申塔の西側に巡拝記念碑を兼ねた道標、木の陰に小さい石塔があるが、これは判読できない。



県道に面した石塔群



無縁者供養塔



庚申塔



道標



不明石塔



巡拝記念碑

96. 木戸台・町原古墳群

木戸台への連絡道から県道に出ると、その正面から東に向かって、いくつかの土盛りが見える。これが木戸台・町原古墳群の一部の古墳である。この古墳の一部は、昭和51年と平成5～7年の2度に渡って発掘調査された。調査された古墳は円墳が1基、方墳が2基で、いずれも後期で、埋葬施設こそなかったが、周りからは同期の土壙墓が発見されている。出土遺物では土師器や須恵器のほか、埴輪片もあった。

また、古墳時代以外の遺構・遺物も一緒に出土していて、周辺の遺跡との関連も考慮しなければならない。古いものでは旧石器時代の遺物集中地點1基からナイフ形石器が出土した。縄文時代では早期の炉穴が45基検出され、早期後葉の土器が多数出土し、この地域の当該期を解明する資料となった。本遺跡のすぐ西には後・晩期の木戸台貝塚があるが、ここでは当該期の土器は少なかった。



現在の町原古墳群



発掘調査中の町原古墳

97. 町原馬頭観音と小さな神社

県道を古墳を右に見ながら東に進み、農協を過ぎると両側が山林になり、右側の山林の中に少し開けた小高い所に馬頭観音の文字塔がある。裏に昭和49年、加瀬某と記され、さほど古くない造立である。塔の先には切り通しのような窪地があり、これがかつての道であったことを伺わせる。

この切り通し道を少し東へ行くと、また山林の中に小さな神社の本殿がある。



山林の中の小さな神社



馬頭観音の文字塔

神社にはおれや額もなく、どのような神様が祀られていたか分からず、今はお供えも御幣もなく、忘れ去られた神社なのであろうか。

98. 大総中学校跡

県道をさらに東に行き、右に入る道を曲がって行くと、校舎のような建物と広場が見えてくる。ここが元大総中学校の跡で、旧大総村が戦後の新制中学校がなかったため、昭和22年に大総小学校に間借りして独自に造った。その翌年、新たにここに校舎を造り、大総中学校とした。しかし、昭和34年、町村合併により、大総村がなくなり、それに伴ってこの中学校も統合され、廃校となつた。わずか10年ほどの中学校であった。その後、中学校は私立大学に払い下げられ、最近まで使われていた。木造校舎の跡は懐かしい風情を残しているが、朽ちようとしている。



旧大総中学校の校舎

99. 町原稻荷神社と大銀杏

県道の南側にはちょっとした広さのある境内を有する、町原稻荷神社がある。境内の正面奥に神社の社殿が立ち、その左手前の境内中央に大銀杏が植わっている。神社は江戸初期に鎮座したと思われ、この神社北側に安養寺というお寺があったと言われるが、今はその名残は何も残っていない。神社は手前に新しい拝殿が立ち、奥に彫刻の見事な一間社流れ造りの本殿がある。この拝殿に7点の大絵馬が奉納され、その中には明治初期の菊川三英作「田原の藤太と琵琶湖龍神図」の見事な絵馬が目を引く。

境内の大銀杏は目通り6.5m、樹高20mあり、途中の分枝からは氣根の乳が垂れ下がり、推定樹齢500年ぐらいの大樹である。この銀杏の黄葉は遅く、11月下旬頃で、まだ樹勢は強く、多くの葉が黄色く色づいたときは見事と言うほかない。また、この大銀杏は雌樹で、落葉と伴に落ちる銀杏（ぎんなん）は、足の踏み場もないほどである。この銀杏をよく見ると、中に葉に付いた実がある。これを葉付銀杏と呼ばれ、県内でも他に何本か知られている。



町原稻荷神社



黄葉した大銀杏



田原の藤太と琵琶湖龍神図絵馬



お葉付銀杏の実

100. 町原稻荷神社前石塔群

県道山武横芝線をさらに東に行くと、右側に大銀杏のある稻荷神社があり、その向かいの角に小堂と石仏が並んでいる。小堂の中には大師が鎮座し、その左横の石仏は地蔵である。また小堂の右側には巡拝記念碑が立っている。後で分かったことであるが、ここにはかつてお寺があつたと言う。おそらくこの石塔群は、本来お寺の境内にあったものかもしれない。そう考えるとこの辺に残されたこれらの石塔群の存在が見えてくる。石塔群で向かって一番左にあるのは、如意輪観音の容像を彫った十九夜塔で、本体の高さは47cm、だいぶ傷んでいるため造立年は分からぬ。小堂の中にお地蔵様の立像と奥に座像があり、立像は傷みが著しく、座像は嘉永四(1852)年の紀年がはっきり見え、赤く彩色されている。中央が小堂に入ったお大師様で、石造りで衣に赤く彩色されている。次は大きな粘板岩製の読誦塔で大正13年と新しい。最も右側は巡拝記念碑を兼ねた道標で、年代は不明、高さは166cmあって、この類いの石塔では丈が高い。

以上、6体の石塔が立っているが、近くにお寺につきものの墓塔は見られないため、果たしてここにお寺があったのか疑問が残る。



県道脇に並ぶ石塔群



十九夜塔



お地蔵様



お大師様



巡拝記念碑

101. 町原庚申塔

県道をさらに東へ歩くと右側に欅が並木の様に並び、それが途切れた角に隠れるように、青面金剛の容像を彫った小さな庚申塔が立っている。高さは67cmで、青面金剛も三猿も彫りが浅く、可愛らしい庚申塔である。この庚申塔は側面の紀年銘から享保八(1724)年の造立てで、町原集落の入り口立てたものであろう。現在も20軒に満たない小さな集落でも、これを護るためそれにあわせて造立てたさやかな庚申塔である。



町原庚申塔

102. 町原の塚

県道を大総小学校の前を過ぎ、大総郵便局の向いの小道を入ると保育園があり、その保育園の裏の山林の中に一辺10mほど、高さ70cmくらいの塚のようなものがある。文化財地図上では広台古墳群の方墳と登録されているが、およそ古墳とは見えない。先年、ここを持ち主が草刈中に、塚上で石を見つけた。通報を受けて見に行ったところ、見つかった石は五輪塔の火輪であった。さらに同じものをもうひとつ見つかった。その2個の場所を再確認すると、東側の辺の2mほどの間隔で置かれていたことが分かった。それで想像されるのは、石は鳥居の礎石で、この壇上に神社があったのかもしれない。あとは発掘調査してみなければ分からないが、そのままそうっとしておくのもまた良いのではないか。



基壇のような塚

103. 町原北小堂・石塔群

稻荷神社前石塔群横の道を北へ100mほど行くと、左側に小堂と石塔が立っている所がある。小堂には格子が掛けられ、中には高さ50cmほどの木造聖観音が安置されている。金箔が全体に貼付けられ、像姿や光背、台座などの形から江戸元禄期の作と思われる。この仏様が稻荷神社前にあった安養寺の本尊であったらしい。手前の石塔の一番右は、源信という修験者が各地の山岳で修行した供養塔と思われる。また後の石塔は無縁仏塔と刻まれている。小堤溜池に下りる手前の墓地の前には、万靈塔と思われるお地蔵様が立っている。



小堂と石塔群



木造聖観音立像



修行供養塔



墓地の前のお地蔵様

104. 小堤溜池

県道に戻り、大統小学校の脇の道を北へ入り、その先の二叉を左に行き、坂を下っていくと溜池が見えてくる。この地域は古来より田植え時期になると水不足が深刻で、よく水争いがあったと言う。そのわりに溜池が少なく、この小堤の溜池が唯一のものである。ここでは谷津に2箇所堤を築き、上の池と下の池が造られ、今も水をたたえている。これらの溜池については、江戸文政十一年の文書に記され、他に3箇所あった。既に江戸期には築堤され、池が造られていたことが分かる。



小堤上の池

105. 小堤子安神社

下の池の堰堤南側には、子安大明神を祀った小堂があり、その横には十九夜塔、大師様を祀った祠、お地蔵様が立っている。子安大明神は子安観音でもあり、子供の健やかな成長を祈願した神仏である。十九夜塔は水子供養のために建てられたものが多く、たまに子安観音と混同されることもある。お地蔵様は良いとして、お大師様が2体並んで、小堂に鎮座しているが、台座が見えないため、何番目かは分からぬ。



下の池ほとりにある子安神社



お大師様



十九夜塔



お地蔵様

106. 小堤庚申塔

小堤のため池から県道横芝下総先に出て少し北へ進み、右側の数軒ある民家の間の小道の脇に青面金剛を彫った容像の庚申塔が立っている。塔は南を向いているが向いているが、おそらく小堤の村を護るために、ここに建てたのであろう。造立年は明和元(1764)年、高さは65cmで、中ぐらいの大きさである。



小堤庚申塔

107. 東福寺

県道横芝下総線を南に戻り、ため池の先の山へ上がる道を右に上ると、坂の途中の右側に東福寺がある。天台宗の寺院で、今は無住となっているが、境内はきれいに整備され、山側の奥にはお墓が整然としている。境内入り口の左側には、古い墓塔を集めた無縁仏塔があり、右側にはかなり痛んでいるが、六地蔵が無造作に立っている。



東福寺本堂



六地蔵



無縁仏塔

108. 小堤日吉神社

東福寺の道を挟んだ南側には、一段高い所に日吉神社が鎮座する。神社の参道は、山へ上がる手前から続き、数十段の石段を上がって社殿に着く。神社の周りは杉林に囲まれ鬱蒼としていて、境内は昼も直薄暗い。社殿は拝殿にその後ろに一間社流れ造りの本殿が並ぶ。また、真後ろには小堤神社の社殿があり、ほかに三峰社の小祠等が鎮座する。

日吉神社は、天台寺院を守護する神社で、本社は國常立尊を祭神として祀っている。



小堤日吉神社

109. 小堤聖福院

県道に出る手前の南へ行く小道を行き、突き当たりを右に曲がって少し坂を上ると、左側に方三間堂と庫裏の建物があるお寺がある。聖福院といわれるこの寺院も、無住となって久しく、荒れ寺となっている。お堂の中は入れず、本尊があるのかは確認できない。真言宗智山派のお寺であったというが、なんとか本堂だけでも残ることを願う。



小堤聖福院

110. 伊能忠敬成長の処

江戸後期に日本全国を測量し、日本全図を造ったと言われる伊能忠敬、その伊能忠敬が青春を過ごしたところがここである。伊能忠敬の父は、ここの小堤神保家から九十九里の小間家へ婿に行き、その小間家で嫡子として延享二年(1745)忠敬が生まれた。しかし、直後婿先の嫁が亡くなってしまう。そこで婿に来た父は養子先を出され、実家に戻らざるを得なくなつた。しかし、忠敬は11歳まで小間家に残つたが、小間家に親戚筋から跡継ぎが入り、居ずらくなつた忠敬は父の実家に戻り、成人になり本人が伊能家に婿に入るまで過ごしたのがこの家である。この神保家、元は白井千葉氏の被官で、坂田城に井田氏が入つたときには、時の千葉氏から井田氏の執事(家老)として従うよう命じられ来たものと思われる。主家の井田氏は慶長十八(1590)年の小田原攻め以後、徳川氏に付き、この地を離れるが、神保氏は元は千葉の土豪であることから、ここに残り帰農した。その神保家から伊能忠敬が出たのである。伊能忠敬の父は実家に戻つた後、実家はすでに惣領が継いでいたため、近くに分家し新宅として今日に至る。



伊能忠敬成長の処



伊能忠敬実父旧宅碑



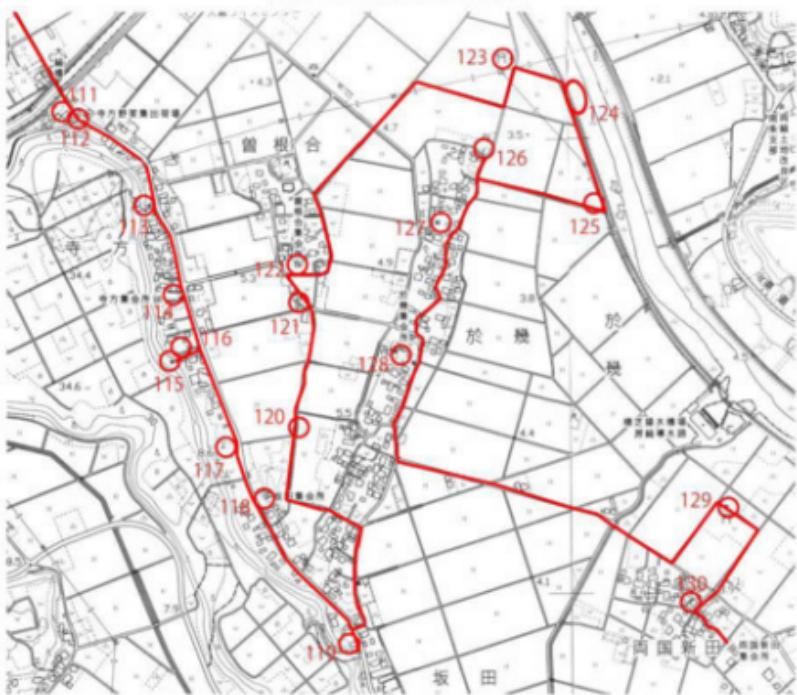
伊能忠敬成長の処碑

九. 寺方・坂田・曾根合・於幾・両国新田

県道横芝下総線に沿って南へ行くと、両総用水を過ぎて台地の下に沿って寺方、坂田と続き、また台地と栗山川との間には、曾根合、於幾、両国の自然堤防上の集落がある。県道沿いの集落は小堤から続くように、台地の裾に張り付くように細長く、その中にお寺や神社が点々として分布する。曾根合と両国は自然堤防というより、低地の砂州上の微高地で、小規模ながら集落が固まり、江戸期の石塔などが見られる。於幾は栗山川には並行してないが南北に長く、典型的な自然堤防上の集落である。ここには寺社や平安時代の遺跡が存在し、古くから営まれたところであろう。



銚子連絡道と於幾の集落



111. 寺方巡拝記念碑と庚申塔

小堤から県道を南へ歩き、両総用水に架かる大総橋を渡ると寺方である。橋を渡って県道の右側にある民家の間の僅かの隙間に、石塔が立っているのが見える。分け入ってよく見ると、「伊勢西国四国 月山羽黒山湯殿山 登拝記念碑」と文字が彫られ、巡拝と出羽三山登拝記念の碑であることがわかる。高さは138cmの柱状で、明治34年造立と記され、横面には方位と地名が描かれ、この地域に多い記念碑と道標を兼ねたものである。

記念碑の後ろには、半ば下半身が埋もれるように、青面金剛の容像を彫った庚申塔が立っている。地面から出ている高さは55cmほどで、草に隠れていて、草を描き分けよく見ないと見逃してしまう。宝永七(1710)年の紀年銘があり、寺方を護る庚申塔であろう。



半ば埋もれた庚申塔



巡拝、登拝記念碑

112. 寺方道路元標

寺方三叉路の道脇に、背の低い石塔が立っている。あまりに背が低いため、車に乗っていると気づかないで通り過ぎてしまう。石塔は柱状で、表に道路元標と彫られ、それとわかる。道路元標は明治以降、各府県ごとに設置し道程の調査を命じている。さらに大正8(1919)年旧道路法で各市町村に1個ずつ設置することとされ、ここのが旧大総村の道路元標であろう。町内では道路元標が確認できたのは、ここと本町の2基だけである。



道路元標

113. 寺方真珠院

寺方三叉路を過ぎ、県道を南へ100mほど行くと右側に空き家のような建物があり、敷地の奥に墓塔が立っている。はじめここがお寺だとは思えなかったが、地図上ではお寺の印があり、真珠院と言うお寺であることが分かった。奥の墓塔はいずれも江戸時代のもので、近年は全く宗教上の利用がなかったように思える。敷地の中央には如意輪観音を彫った十九夜塔が立っている。



真珠院のお堂と思われる建物

真珠院境内の十九夜塔

114. 寺方集会所前

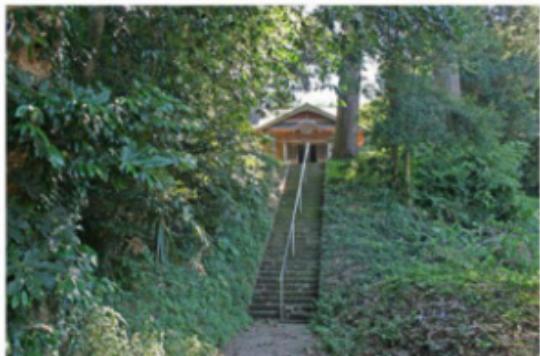
真珠院からさらに県道を南へ歩き、県道の脇に消防庫に当たると、その後ろにお地蔵様や宝夾印塔など、石塔が散乱している。その奥には寺方の集会所があって、駐車場の広場が面積を占めている。同じ大きさのお地蔵様を数えると6体を数え、六地蔵であることが分かり、ここにかつてはお寺があったことが推定される。横芝町歴史地名事典で見ると、円照寺と言う天台宗のお寺が記され、おそらくこのお寺がここにあったのであろう。六地蔵の周りには他に観音様や地蔵を浮き彫りした墓塔があるが、いずれも放置された状態で、何ともいえない状況である。



寺方集会所前の六地蔵

115. 寺方稲荷神社

寺方集会所前から県道をほんの 50mほど南へ行くと、今度は右の小道の奥に、鳥居が立ち石段が山を上がっているのが見える。そこを上っていくと神社の社殿が立ち、手前には大きな杉の木がそびえているが、境内の周りにはほとんど木がなく、意外と明るい神社の境内である。すぐ見える社殿は覆屋で、その中に本殿があり、その中央部に稲荷社の祭神である倉稻魂命（うがのみたまのみこと）の神像が鎮座している。本殿も社殿その梁などには見事な彫刻が施され、100 年は経つと思われるその建築は、人々の思い入れが入っていたと思われる。境内に立つ大杉は 2 本で、径 1 m はあり、樹齢 500 年は経っていると推定される。



稲荷神社に上がる石段



木造倉稻魂命の神像

116. 寺方光台寺跡

稲荷神社の境内から下を眺めると、左側に広場があり、その中に小堂が立っているのが認められる。降りてそこへ行くと手前に墓石が散在し、また小堂の奥に墓石のない墓域も見られた。その肝心な小堂を除いてみると、中に小さな仏様が安置され、それは普賢・文殊菩薩を脇侍にした釈迦三尊像である。お釈迦様を本尊とするお寺は禅宗寺院で、地名事典によれば光台寺が当たり、曹洞宗で坂田城主井田氏の菩提寺であったと言う。しかし、今は釈迦三尊像が僅かにそれを伝えているのみである。

奥の墓域はおそらく埋墓であろう。



光台寺跡



本尊の木造釈迦三尊像

117. 坂田靈通寺

県道をさらに南に進むと銚子連絡道の高架が跨ぎ、それを潜るとすぐ右側にま新しいお堂の立つお寺が見える。このお寺は真言宗智山派で、15世紀にはあったと言う記録があり、元は山の中腹に大きな堂宇を構えていたと言う。本堂の周りには多くの墓石が立ち並ぶが、あまり古い墓塔は見られない。



銚子連絡道の脇に立つ靈通寺

118. 坂田熊野神社

県道をまた南に行くと、左側に坂田集会所がある。この集会所の敷地の県道寄りに、小さな社殿が立ち、南側隅に鳥居が立ち、この集会所自体が元は熊野神社の社地であったと思われる。今の社殿は戦前に作られたものと思われるが、その脇には江戸期のものと思われる石塔の一部が転がっていて、ここが江戸時代には信仰の場としてあったのであろう。



坂田集会所の前にある熊野神社

119. 坂田庚申塔

県道を南へカーブの先の左側に、山へ上がる道があり、その登り口に庚申塔が立っている。ここは庚申塔は高さ150cmで青面金剛の容像を彫ったもので、その面相は憤怒を強調し、恐ろしげである。この山へ上がる道は城があつたときからあつたとは考えられず、庚申塔がこの道の分岐に意識的に立てたか分からぬ。しかし、ここは坂田集落の入り口であれば、その守護神としての意味が出てこよう。

ここから上がる坂道の途中には、何の神様を祀ったか分からぬ石祠が、2基並んで立っている。



坂田の庚申塔

120. 曾根合地蔵尊と巡拝記念碑

坂田城の上り口から県道を北へ少し戻って、右にそれる道があり、そこを入って北へ行くと今度は左に曲がり、二つ目の十字路を右に曲がって行くと、また銚子連絡道の高架にぶつかり、それを潜ると右側の辻に石塔と祠がある。祠の中にはお地蔵様が鎮座し、その左には柱状の石塔が立ち、「四国 西国 奉拝伊勢御領座千九百年記念」と彫られ、横面には方位と地名が記され、道標を兼ねた巡拝記念碑である。右にも「伊勢参宮 四国西国 参拝記念」と彫った明治43年の碑が立つ。田んぼの中に立つ地蔵尊と巡拝記念碑であるが、この道を行きかう人々に拝まれたのであろう。祠の中には五輪塔と宝篋印塔の部材が転がっている。



曾根合の地蔵尊と
巡拝記念碑

121. 曾根合庚申塔

さらに田んぼの中の小道を北へ行くと、五叉路の左正面に大きな岩の上に鎮座する青面金剛の容像を彫った庚申塔がある。岩の上に立つので高く見えるが、塔身の高さは 86 cm で中ぐらいの大きさであるが、青面金剛の面相は恐ろしく憤怒の表情に彫られ、通る人を威圧するようである。延享二(1745) 年の造立てで、像の残りは良い。庚申塔の前に置かれた 2 基の柱状の石は、方位と地名が彫られ、小さいながら道標である。



曾根合庚申塔と道標

122. 曾根合集会所

曾根合庚申塔から道を左斜めの少し広い道を行き、次の右に入る道を曲がると、左側に曾根合集会所がある。敷地の中に入って左側に回りこむと、地蔵とか観音様を彫った古そうな石仏と言うか墓塔が寄せ集められており、おそらくここも元はお寺があったと思われる。今はそのお寺の名前も分からなくなり、曾根合集落には現在お寺も神社もなく、お参りには近くの集落の寺社に行くのだろうか。



曾根合集会所の敷地に佇む石塔

123. 於幾水神社

曾根合集会所から東へ出て北へ回り込み、北東へ向う田んぼ道をまた行き、さらに東へ向う道を曲がり、栗山川を渡る新栗嶋橋の手前の十字路を左に曲がると、その先の左側の社に水神社がある。ここには二つの社があり、大きい方に水神様が祀られ、小さい方には三峰神が祀られている。この水神様の社の中には木造の阿弥陀様が安置されているが、どういう経緯でここにあるのだろうか。

また、神社の前には「庚申」の文字を彫った庚申塔と、「南無阿弥陀仏」と彫った念佛塔が立っている。庚申塔は高さ 57 cm で、寛保元(1741) 年の造立、念佛塔は高さ 77 cm、文化十四(1818) 年の造立である。



於幾水神社

124. 栗山川河川敷のチューリップ

水神社から栗山川の土手に上がり、土手を南に歩いていく。栗山川沿いには所々、今日では希少植物となってしまった日本のチューリップを見ることが出来る。このあたりでも春先白い可憐なその花を見ることが出来る。

このチューリップはアマナと呼ばれ、白い小さな花が春先に咲く。しかし、花の時期は短く、咲き終わると周りの草に覆われ、分からなくなってしまう。わずかな時期の可憐な花を、守って行ければと思う。



栗山川河川敷に生えるアマナ

125. 栗嶋姫由来の碑

栗山川の土手を新栗嶋橋を越えてさらに南へ行くと、土手の下にまだ新しい御影石で造った石碑が立っている。碑文を読むと、昔、高貴なお姫様が都より逃れてこの地に住み、そしてこの地で亡くなったの哀れみ、供養のために立てたのが栗嶋宮だという。ここに碑を建てたのは、姫が乗って来たであろう丸木舟が、大正時代にここから出たからだと言う。ちなみに丸木舟は縄文時代のもので、それと伝承とを旨く繋ぎ合わせて考えた地元の人たちの話である。



栗嶋姫由来碑

126. 於幾北基地前の五輪塔

土手から西へ集落の方へ戻り、北のはずれの基地の前に、小さな五輪塔が置かれている。この五輪塔、よく見ると一つの石で造られた一石五輪塔で、この地域ではあまり見られないものである。普通五輪塔は上から空・風輪、火輪、水輪、地輪の4つの部材からなっている。しかし、小さいものは一つの石で造ることがあり、ここのは空・風輪は別であるが、それ以外は一石である。この五輪塔、形から見て中世室町時代のものである。



一石五輪塔

127. 於幾栗嶋宮

於幾の集落を抜ける道を南へ行くと、右側に入ったところに鳥居が立つ栗嶋宮がある。この栗嶋宮は元最勝院と言うお寺の境内に勅請したものであったが、明治の廢仏毀釈によってお寺が廃され、栗嶋宮のみが占地されたらしい。また、別の話では最勝院は別の所にあったとも言われる。この栗嶋宮の覆屋は他の神社のとは異なり、切妻屋根で梁が正面を向き、正面の廂屋根がなく、梁幅に対して棟がずいぶん高い。この覆屋の中に流造りの本殿があり、その中に栗嶋大明神の神像が納められている。しかし、面白いのは本殿の前に、護摩壇が置かれていることである。護摩壇は密教で使われるもので、おそらく最勝院が真言宗智山派であることから、その名

残であろう。また、覆屋の中には大きな奉納額（繪馬）が数点あり、その中で遊女一行参詣図奉納額は、この粟嶋宮への信仰とご利益を願った、面白い一品である。粟嶋大明神は子育て、婦人病、裁縫上達にご利益があると言われ、かつては周辺地域の女性が大勢参詣に訪れ、縁日には大変賑わったと言う。今ではほとんど参詣する人もなく、静まり返った境内だけがきれいに整備されている。

この粟嶋宮の境内左側には庚申塔が、その前に木で隠れるように姫塚の石碑、社の後ろには墓塔らしい石仏と中世の板碑が立っている。庚申塔は高さ 121 cm の青面金剛の容像を彫った立派なもので、姫塚碑は最近建てたものである。板碑は 2 基とも黒雲母片岩製の下絶型で、キリーグ（阿弥陀如来）とパン（釈迦如来）の種子板碑である。前の五輪塔と含め、この於幾は古い痕跡を多く残している。



於幾粟嶋宮



粟嶋宮内部（手前が護摩壇、奥が本殿）



粟嶋大明神神像



於幾葉嶋宮裏にある板碑2基



姫塚碑



葉嶋宮前の庚申塔



遊女参詣図奉納額



大正12年に出土したという丸木舟

128. 於幾長寿院

さらに集落の中の道を南へ行くと、また右側にこぎれいに建てられた新しいお寺と、新旧の墓塔が並んだ所がある。やはり真言宗智山派の寺院で、集会所の横に小さな本堂がある。本尊は木造聖観音立像で、脇には大日如来も安置されている。敷地には地蔵や観音を彫った墓塔が並び、江戸時代からの歴史を示している。1月末には、収蔵されている大般若経を引き回す、御大般若が行われる。



於幾長寿院本堂



聖観音像と大日如来

129. 両国新田稲荷神社

於幾の集落を抜ける道を南へ出ると、また銚子連絡道の高架に当たり、そこを抜けてすぐ左に曲がり、しばらく行って水路を渡ると左側に、こんもりとした杜が見える。水路を渡って二つ目の田んぼ道を左に曲がり、その杜へ行く。その杜の中は少し小高い微高地で、そこに稲荷神社が鎮座している。周りは水田に囲まれ、まさにその稲を護る稲荷神社である。



両国新田稲荷神社

130. 両国新田道祖神

稲荷神社の正面から右に歩き、元の道に戻り、それを越えて両国新田の集落の中に入り、すぐ右に曲がるとそこに小堂と石塔が並んで立っている一角がある。小堂の中にはお大師様が鎮座し、また、祠の中には石像の子安觀音が納まっている。その間には道祖神の新旧の文字塔立ち、右端には聖徳太子塔がある。これらを見るどこにかつてはお寺があつたと思われるが、地元の方に聞くと、お寺はこの先の左側にあったと言う。しかし、今は何も痕跡は残っていないと言う。



両国新田道祖神の石仏群

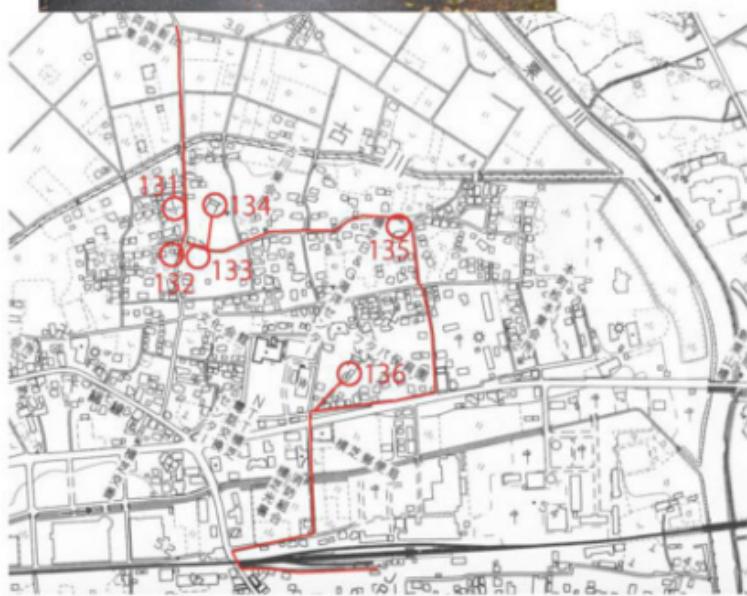
右端の石造子安觀音

十. 古川・本町東部

両国新田の集落から水田の中を通る道を南へ行き、古川の水路を渡ると古川の住宅地に入る。古川は栗山川の縁から、西は坂田に近い浅間神社まで、北は水路に、南は細い小道に区切られた、東西に長い範囲を示す。これはここが九十九里砂堤列の第1列の砂州に当たり、その砂州上を東西に走る道(古道)を境に、本町と接している。古道は場所により筋を変えたりしているが、この道筋にはそのため古跡が多く遺され、昔の街道を歩くような雰囲気を醸し出している。古川東部から本町東部に出て、今の国道を渡ると総武線の横芝駅が見え、郵便局の脇を通って踏切を渡って駅に戻り、横芝北部の旅は終わる。



古川の小道と
脇に佇む道祖神



131. 古川古里の墓地前の六地蔵

両国新田から来て水路を渡って、住宅地に入ったすぐ右側に、共同墓地がある。その墓地を入って右側に、背丈が異なるお地蔵様が6体、雨よけ屋根の下に並んで立っている。普通六地蔵は背丈がそろい、台座から頭まで形はほとんど同じであるが、ここのは台座から光背まで皆異なっている。さらに顔は胡粉で白く、衣は弁柄で赤く塗られていてカラフルである。それは今も厚く信仰されている証拠であろう。



彩色された六地蔵

132. 古川古里路傍の観音様

上の墓地からまた南へ行くと、右側にセンダンの木の下に、観音様とお地蔵様が立っている。その傍らには石碑が立つ。観音様には元禄七年、男女の戒名が彫られ、おそらく夫婦の旅人がここで倒れ、その夫婦を供養した石仏であろう。お地蔵様の方には元禄十年、二十三夜講中と読め、地元で建てた二十三夜塔である。こちらも赤彩が見られ、この地区の石仏の特徴なのであろう。



梅檀の木陰に佇む二十三夜塔と供養塔

133. 古川古の道祖神

上の石仏の所から少し戻り、東に行く道があってそこを行くと、左側の藪の前に石祠が2基立っている。うち1基には道祖神と彫られ、それと分かる。ここにこのような道祖神があるという事は、この細い小道が古い道である事を示している。左側の石祠は寛政の紀年銘がある。



古川古道脇の道祖神

134. 古川四社神社

道祖神石祠の向側に北へ向かう参道があり、手前に鳥居が立っていて、その先の小高くなった所に小さな社が鎮座している。ここが古川四社神社で、誉田別命、經津主命、武甕槌命、倉稻魂命の四柱の神様を祭っている。



古川四社神社

135. 古川の庚申塔

四社神社の前の道をさらに東へ行き、少し曲がりくねった先の薄暗い所に、覆いかぶさる木の陰に庚申塔の文字塔と三猿を彫った石仏が立っている。三猿を彫った方は元禄一年の造立てで、町内でも古い方である。庚申塔の右には、大山祇神と清掃記念の石碑がある。また、手前には鳥居の根元の石が取り残されている。



古川庚申塔

136. 本町松本四所神社

庚申塔の所を右に曲がり、国道へ出てまた右に周り信号の所まで来ると右側に鳥居があり、そこをくぐって中へ入ると四所神社の社が、広い境内の中に立っている。この神社は伊波比主命、須佐之男命、別雷命、菅原御靈の四柱の神様を祀った村社である。境内にはこのほか神明造の護国神社と、熊



本町松本四所神社

野神社、三峰神社などを祀った小祠が四社あり、本町の中心的な神社で、古くに創建されたと思われる。



四所神社境内の小祠



東長山野遺跡と森が続く下総台地

あとがき

横芝光町の文化遺産ガイド1に所収した所は、旧横芝町の北部、下総台地が大部分を占める緑豊かな所である。今日でこそ森が深く茂り、人の手が加わっている所が少ないが、遠い昔から人々が足を踏み入れていたことが、遺跡の発掘によって明らかになっている。最も古くは今から3万年前の石器も発見され、この地域に特徴的な旧石器も多く出土した。縄文時代には海に近いことから貝塚も形成され、太平洋側最大の姥山貝塚も存在する。また縄文時代の集落も台地の上に形成された。古代には押隈郷や長倉郷の集落が成り立ち、中世には坂田城が造られて、北総地域の要となった。この様に山の上には多様な人々の痕跡が残され、今日も歩くと見ることもできる。どうぞこのガイドブック片手に、町の山野をハイキングしながら、文化遺産を訪ねてみてはいかがでしょうか。

このガイドブックを作るに当たっては多くのご協力頂きました。ここには機関等のみを記して御礼申し上げます。

横芝光町文化財審議会、横芝光町歴史ロマン研究会、生涯学習講座郷土を知る再発見の旅受講生、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県教育振興財団、芝山町立古墳はにわ博物館、房総石造文化財研究会、鬼来迎保存会、中台神楽保存会、宮内神楽保存会、鳥喰下大神楽保存会、屋形四社神社里神楽保存会

本書の執筆、編集は、横芝光町教育委員会社会文化課文化財担当道澤明があたった。内容についての文責は道澤に帰す。

横芝光町の文化遺産ガイド1

発行日 平成29年3月31日

発行 横芝光町教育委員会

編集 横芝光町教育委員会

社会文化課生涯学習班文化財担当

印刷

